UNION Foundation For Ergodesign Culture

公益財団法人 ユニオン造形文化財団

2022(令和4)年度 事業内容報告書

UNION Foundation For Ergodesign Culture

Annual report 2022

2022

CONTENTS

02　ごあいさつ

03　ユニオン造形文化財団　組織

04　財団の概要

05　調査研究　助成

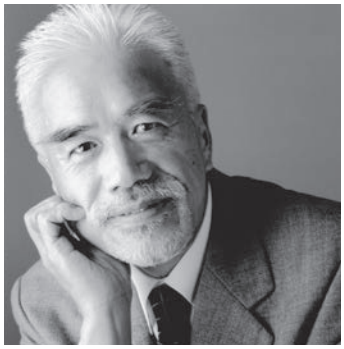
11　国際交流　助成

13　在外研修　助成

15　第29回ユニオン造形デザイン賞

ごあいさつ

Greetings



公益財団法人　ユニオン造形文化財団
理事長　立野　純三

空間造形デザイン分野における各種活動支援の為の助成並びに優れた創作活動の顕彰を行い、芸術文化の発展への貢献、そして国内にとどまらず広く世界へ開かれた当財団の活動も、おかげさまで29回を迎えました。今回も世代をこえて各界より多数のエントリーをいただき、誠に喜ばしい限りです。

本年度の助成活動に関しましては、安藤忠雄先生をはじめとする選考委員の方々の厳正な審査により、調査研究部門6件、国際交流部門2件、在外研修部門2件の計10件に対して実施させていただきました。

また、顕彰事業の第29回のユニオン造形デザイン賞公募に関しましては、数々の受賞歴を持ち、新しい建築の概念を探求し続ける平田晃久先生に審査員をお願いし、「大きな家」という興味深いテーマを頂きました。
「大きさ」に焦点をあて、現代の多くの住宅に欠落しているような豊かさを持った家を設計するという平田晃久先生の出題に多くの優秀な作品の応募があり、受賞が決まり喜ばしい限りです。

これからも我が国の芸術文化の発展への一助となるよう、活動を続けていく所存です。
どうか今後とも温かいご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2023年3月

ユニオン造形文化財団　組織

■役員

理事長	立野　純三	(株)ユニオン 代表取締役社長
常務理事	小川　進吾	(一財)産業医学研究財団 理事長
理事	山本　博史	(株)小倉屋山本 代表取締役社長
	吉本　晴之	(株)大阪マルビル 代表取締役社長
監事	武本　勝司	武本公認会計士事務所 公認会計士・税理士
	南川　和茂	南川和茂法律事務所 弁護士

■評議員

嘉納　秀一	三宝電機(株) 代表取締役会長
小林　隆太郎	(株)あみだ池大黒 代表取締役会長
長谷川　惠一	学校法人エール学園 総長
吉川　秀隆	タカラベルモント(株) 代表取締役会長兼社長

■選考委員

安藤　忠雄	建築家・東京大学 特別栄誉教授
絹谷　幸二	画家・東京芸術大学 名誉教授
豊口　協	長岡造形大学 名誉教授
古山　正雄	京都工芸繊維大学 名誉教授
松本　明	近畿大学 建築学部建築学科 教授
蓑　豊	兵庫県立美術館 館長

■事務局長　桑田　恒雄

財団の概要

■名　　称　　公益財団法人ユニオン造形文化財団

■所　在　地　　事務局／〒550-0015　大阪市西区南堀江2丁目13番22号
TEL.06–6532–8764

■設立年月日　　1994年5月24日

■主 務 官 庁　　内閣府

■目　　的　　空間デザイン文化の振興と向上を図るため、同分野に関する調査研究及び国際交流に対する助成を行うとともに、同分野の優れた創作活動の顕彰を行い、もって我が国芸術文化の発展に寄与することを目的とする。

■業 務 内 容　　空間造形デザインに関する調査研究及び
国際交流（若手芸術家の在外研修を含む）に対する助成
空間造形デザインで優れた創作活動の顕彰
その他目的を達成するために必要な事業

■事業一覧　　2022（令和4）年度

助成・顕彰	件数	金額
調査研究	6	9,000千円
国際交流	2	2,000千円
在外研修	2	3,600千円
顕　　彰	10	2,500千円
計	20	17,100千円

調査研究

2022（令和4）年度助成事業

松田 法子
Noriko Matsuda

京都府立大学　准教授
専攻分野／建築史・都市史

●共同研究者
中谷 礼仁　早稲田大学・教授
青井 哲人　明治大学・教授
伊藤　孝　茨城大学・教授
藤原 辰史　京都大学・准教授

●研究課題
人類の独自性は地球を土台かつ素材として，生きる環境を自ら造形することである。申請者らは，その将来像を歴史的に展望するため，新しい歴史学として「生環境構築史」を提起し，研究推進力となるWEBzine《生環境構築史》（https://hbh.center）を立ち上げた。2カ年4号ずつを区切りとし，全3期（6カ年・全12号）のダイナミックな活動の展開を計画している。まもなく第1期2020-21年の「生環境構築史の方法とイメージの提示」を達成するが，既に多方面から反響が寄せられている。今回の申請内容は，第1期の成果を踏まえ，かつ2024-25年の第3期「未来実践の展望」への跳躍台となる第2期・2022-23年のプログラムとなり，学際的・国際的連携を図る方法的集成を主たる目的とする，「生環境造形の基礎となるエコロジー理論とデータベースの構築」フェーズである。

■主題

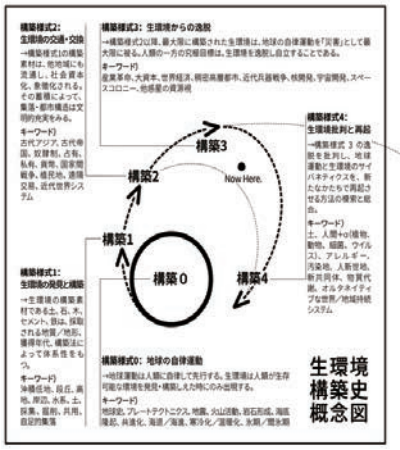
地球環境との史的関係から生環境造形の未来を展望するための学際的・国際的データベースの作成と公開
― 生環境構築史WEBzineの編集・制作・運営を通して

■研究計画の概要

（1）研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

生環境構築史は，人類の造形史を長期的視座から見通し，その新たなデザイン・再構築の方向性を展望することを目的に，その萌芽的試みとして申請者らが提起した。「生環境 Built Habitat」とは，原始から現代に至る住居，集落，農地，都市，建築など，人類が主体的に造形してきた全ての人工環境を指す。

その「構築様式 Building Mode（以下、構築）」は4つに分けられる。構築1は石や木などの環境素材を即地的に組み立てる原初段階，構築2は構築素材の地理的な流通と集積を不可欠とする文明段階，構築3は地球を資源とみなす産業化段階に対応する。本活動では構築３世界を批判的に検討し，来たるべき構築４を探究する（図参照）。その際，つねに生環境構築の基盤であり素材である地球そのもの（＝構築0）との関係を史的検討に組み込み，また量と形をともなう造形の観点を重視するのが本研究の特色であり，この点でK・マルクスの「生産様式」や，柄谷行人らの「交換様式」など，最も重要な先行理論と一線を画した独創性を有する。



詳細：http://hbh-center.ne.jp/about-hbh/

こうした枠組みのもとで今回申請する《生環境構築史》WEBzine第2期プログラムの特徴は，データベース的な知見集成を試みる点にある。これは第３期における構築4の環境造形の実践的展望や検証の土台を整備する意義がある。

また上に掲げた目的に照らし申請者らは，建築史を中核に，地球科学・地質，土壌・農業，環境史，芸術・デザイン学といった学際的な共同研究者・研究協力者チームを編成する点にも独自性と意義があり，すでに思想誌や美術館との連携実績もある。

（2）実施計画の大綱

生環境構築史では，WEBzine《生環境構築史》の刊行を，学際的・国際的に重要な研究を結び合わせ，新しい学問を展開するために欠かせないプラットフォームとして位置づける。2カ年4号ずつを区切りとし，全3期（6カ年・全12号）を段階的に展開する計画で，間もなく第1期「生環境構築史の方法とイメージの提示」（2020-21）の最終段階に到る。第1期では，SF，土壌，鉄，庭などの具体的な主題を通して，生環境構築史の体系・概念とその具体的イメージを提供しつつ，多彩な専門家との議論を深め，反響も多数寄せられている。

今回申請するプログラムは，第1期の成果を踏まえて展開される第2期「生環境造形の基礎となるエコロジー理論とデータベースの構築」にあたる。第1期におけるテーマごとの特集とは異なる固有の方法として，データベース的な知見の集成とそれを通じた研究者・研究機関との学際的・国際的連携を推進する。第2期で設定されるこの基礎論・DB整備について具体的に以下の活動を計画する。

◉第5号特集（2022年9月公開予定）「エコロジー論総覧 Encyclopedia of Ecologies」では，土壌学や環境史を専門とするメンバーを中心に，これまで提唱されてきたエコロジー理論・思想を収集・提示しつつ，それらを生環境構築史の方法概念から比較検討する。分野や立場によって異なり，ときに対立さえするエコロジー理論の星座的な見取図を描くことが目的である。

◉第6号特集（2023年3月公開予定）では，地球環境の持続にかかわる世界中のデータベースを生環境構築史の視点から収集する。気候変動，人口統計，都市，農地，汚染，戦争，飢餓など世界の研究者・研究機関が公開する種々のデータベースを一括して比較検討できる場の形成がねらいである。

このように，第5号は理論，第6号は基盤データを扱うことで、これらの関係を結び合わせる観点の獲得を引き続き第2期の課題とし，生環境の構築・造形実践を展望する第3期への不可欠な過程として実現する必要がある。このことも意識しながら，第5号全体の制作費及び第6号データベース構築費と，信頼に足る専門家による両号特別対談の謝金・文字起こし・編集費を当申請に計上する。

（3）研究成果の公表予定

本研究はWEBzine《生環境構築史》の公開を機軸とし，つねに成果公開と一体的に進められる。(2) には本申請で助成を希望する第5-6号の制作・発行について具体的なスケジュールを示した。その他、展示（2021年12-22年5月には21_21 DESIGN SIGHT「2121年 Futures In-Sight」展参加），メディア取材対応（2020-21年には『WIRED』ほか），寄稿（同，『現代思想』『建築雑誌』ほか），フォーラムへの参加など，研究成果の還元・公開機会を随時捉えて活動予定である。

WEBzine《生環境構築史》から発信される成果は，建築・芸術領域のみならず，それらの根本的な土台である地球物理学や，人類の生存に関わる人文社会学，生命学，生物学などに波及する。諸分野の知見を生環境の探究の名のもとに結集させて公表することで，将来を見据えた環境造形の学際的・包括的な基盤の構築が期待できる。また，ウェブサイトは本研究の発祥地としての日本にアドバンテージを与えつつも，要点を英文・中文併記とすることで国外からの積極的な関与を準備する。

なおオンラインを主な媒体・活動の場とする本申請は，感染症の状況にかかわらず助成金を活用できる。

調査研究

■主題

図面資料の整理を通した建築家・石井修の基礎的研究

倉方 俊輔
Shunsuke Kurakata

大阪市立大学大学院工学研究科 教授
専攻分野／建築史

●共同研究者
竹原 義二
神戸芸術工科大学　客員教授／無有建築工房 主宰
石井 良平
大阪工業大学ロボティクスデザイン工学部空間デザイン学科 客員教授／石井良平建築研究所 主宰
遠藤 秀平
神戸大学大学院　名誉教授／遠藤秀平建築研究所 主宰
光嶋 裕介
神戸大学　特命准教授／光嶋裕介建築設計事務所 主宰
山口 陽登
大阪市立大学大学院工学研究科　専任講師／YAP一級建築士事務所 主宰

●研究課題

石井修（1922〜2007）の名は、緑と共生した住宅を数多く手がけた建築家として名高い。特に兵庫県西宮市甲陽園の「目神山の住宅」は、一人の設計者の構想が連作として実現し、後にまちなみガイドラインにも取り入れられ、地域全体を良好にしたものとして、歴史的も稀有な事例である。1976年に石井は目神山に移り住み、2007年に没するまでに22軒の住宅を当地に設計し、うち20軒が実現した。第一作となる自邸「回帰草庵」は、斜面に埋もれるように設計され、よいメンテナンスが施されて内外ともに良好な状態を保っているが、この中に石井修の残した図面が未整理の状態で残されている。1956年に石井が開設し、住宅のみならず、オフィスや商業建築、集合住宅など多数の建築を手がけた「美建・設計事務所」の図面であり。その数は筒にして100以上を数える。石井に対する評価は、建築と環境との関係がますます問われる現在、ますます高まっている。しかし、全業績を扱った作品集も作品リストもないという現状であり、時代に先駆けた建築家の業績を正しく後世に伝える上で最大の重要性を有する、これらの図面資料を分類、整理し、建築家・石井修の仕事の総体を社会に開示することが本研究の課題である。

■研究計画の概要

（1）研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

本研究は、建築デザインとランドスケープを架け渡した建築家・石井修（1922〜2007）の未整理の図面資料を分類、整理し、その仕事の総体を社会に対して提示するものである。

石井修は1922年、奈良県明日香村で生まれた。奈良県立吉野工業学校建築科を1940年に卒業し、大林組東京支店に勤務した後、早稲田高等工学校建築学科で学び、1956年に「美建・設計事務所」を設立して、オフィスや商業建築、集合住宅など多くの建築を設計し、2007年に没するまで設計活動を継続した。

これまでに確実に歴史的に位置づけられた石井の業績として、目神山に設計した一連の住宅がある。石井は1976年に兵庫県西宮市甲陽園に位置する目神山に移り住み、2007年に没するまでに22軒の住宅を当地に設計して、そのうち20軒が実現した。「目神山の一連の住宅」は1987年に日本建築学会賞（作品）を受けた。同年には「目神山の家8」が吉田五十八賞を受賞した。JIA25年賞大賞は、竣工後25年を超えて良好な維持管理がなされている名作に与えられるものだが、2002年に「回帰草庵（目神山の家1）」が同賞を受賞した。また、通りに対して緑が向き合うように配慮した目神山の一連の住宅のあり方は、2003年に西宮市が都市計画決定した「みどりのガイドライン」の方針にも採用されるに至った。当初は理解されなかった石井の試みは、敷地の中で完結する住宅ではなく、地域の公共性に、あるいは地球環境に開かれた住まいを希求するようになった建築界の潮流と呼応する形で、次第に賛同者を増した。そして、没後に一層の注目が集まったと言えよう。今、目神山の一連の住宅の特質を解明し、石井修の仕事の全貌の中でそれを位置づけることには、大きな意義がある。

本研究の特色であり、最大の新規性は、これまで手つかずであった一次資料に基づく点にある。石井の自邸「回帰草庵」に現在、美建・設計事務所の図面資料が多数、保管されている。その数は筒にして100以上となる。保存状態はおおむね良好だが、未整理の状態である。これらを分類、整理することにより、作品リストならびに図面リストを完成させる。石井修については、高い関心を集めながらも、全業績を扱った作品集も作品リストも存在しないのが現状だが、本研究の成果は今後に参照される基盤を形成するものである。

加えて、本研究の独創的な点は、上記の実証的・史料的な石井修研究と並行して、石井の教えを受けた建築家ならびに同様の問題意識から設計を進めている若手の建築家の視点を分析に加えることにある。具体的には、前者については、美建・設計事務所OBである竹原義二・遠藤秀平、子息である石井良平からの聞き取りを中心に、関係者のオーラルヒストリーを収集する。後者については、大学で研究室を持っている建築家の光嶋裕介・山口陽登を中心に、図面資料に基づいた模型を制作する。これらを総合して、石井修を時代の中に位置づける基礎的研究を完成させる。

（2）実施計画の大綱

1. 図面資料の分類、整理

現在、兵庫県西宮市甲陽園の「回帰草庵」に保管されている石井修・美建・設計事務所の図面資料を分類、整理する。図面は筒にして100以上となるが、筒に簡単なラベルが貼ってある以外、リスト化などはなされていない状態である。まずアーカイブズ学の考え方に基づき、筒の単位を崩さないように、対応する作品を照合し、第1段階のリストを作成する。その後、筒の中の図面を逐一リスト化し、図面種類、縮尺、作成年、担当者などのデータを整理する。上記の作業は、申請者（代表者）による監督の上で、各研究室に所属する学部４年生・大学院生が分担する。

2. 石井修に関するオーラルヒストリーの収集

本研究の共同研究者である竹原義二と遠藤秀平は、大学教員を長く務め、また石井修の建築設計事務所の出身者として著名な建築家である。共同研究者の石井良平は。図面資料を管理している石井修の子息であり、事務所以外における石井修の発言も多く記憶している。このような知見を持った人物の見解は、図面資料を分類、整理する上で欠かすことはできない。加えて、こうした経験自体が、今後、評価を進める上での基礎的な重要性を有する。よって、それぞれの記憶をオーラルヒストリーとして記録する作業を進める。まずは３者について、これを行い、その発言の中から聞き取りすべき候補者を拡げていく。

3. 図面資料に基いた模型の制作

図面資料の意味を読み解いていく上で、それに基づいた模型を制作する。石井修の先駆性の一つが、建築デザインとランドスケープを架け渡したことであり、自ら家具も設計するなどインテリアデザインに対する配慮にも特筆すべきものがある。こうした総合的なデザインの性格と意義を読み解く上で、大地とともにある模型をつくることが大きな意義を有する。本研究の共同研究者である光嶋裕介と山口陽登は、環境と呼応する建築設計を進めている関西の建築家であり、模型制作を通じた再読に適任である。各研究室に所属する学部４年生・大学院生が分担して、３〜５程度の模型製作を実施する。いずれの作品を模型化するかについては、上に挙げた図面資料の分類、整理ならびに石井修に関するオーラルヒストリーの収集の成果が反映される。

（3）研究成果の公表予定

2022年11月に兵庫県立美術館において、石井修の生誕100年を記念した展覧会の開催が予定されており、記念出版物も計画されている。本研究の図面資料の整理、分類の成果は、展覧会の展示として公開される。制作した模型に関しても、展示を予定している。また、記念出版物を通じても本研究の成果を社会に対して提示する。

調査研究

後藤 克史

Katsushi Goto

明治大学　研究・知財戦略機構　客員研究員
専攻分野／建築学（都市計画・建築計画）

●共同研究者

Vishwa Shroff
現代美術家 / スクエアワークス　パートナー
小川 貴之
読売理工医療福祉専門学校　建築学科長

●研究課題

現在の日本を始め、欧米の先進諸国おいては高齢化や晩婚化による単身世帯の増加傾向にある。単身世帯が増える将来は確実でありながら、独身で未婚であることは未だに個人に問題があると捉えられたりﾏｲﾉﾘﾃｨとして理解される。また、独居高齢者に限らず、一人で食事することは相対的に不健康であると考えれれている。しかし、単身世帯の増加、高齢化の社会的背景の中、必ずしもひとりで暮らすこと、食事することが否定的に捉えられるべきでなく、居住空間としての「家」と世帯としての「家族」の捉え方の更新が必要なのは明らかである。本研究では特に健康、すなわちWellbeingである生活を送るための基礎である「食」の習慣と「調理」する空間の関係性の研究対象とし、孤食（ひとりでの食事）の空間を調査の発端とし、孤食と共食（食事を他者と共にする）は不可分の事象でもあり、双方を連続した空間と捉えることで、建築計画学的、ｲﾝﾃﾘｱの配置や環境によるによる豊かで健康的な食の空間の獲得に還元できる研究成果を目指す。加えて、シェアキッチン・コミュニティキッチンを施設、コミュニティ内での社会的、空間的な位置付に着目して、「調理」を共同作業、もしくは社会的活動と捉えた際に実現される「家族」の枠組みにとらわれない健康的な住環境創造につながる研究成果を目的とする。

■主題

高齢化する現代都市において、シェアキッチン・コミュニティキッチンの空間と共食と孤食の空間に関する基礎的研究：キッチンおよび食空間の類型と比較調査および現代家庭におけるWell-beingと食文化の基礎的研究

■研究計画の概要

（1）研究の目的と意義

現在の日本を始め、欧米の先進諸国おいては高齢化や晩婚化による単身世帯の増加傾向にある。特に日本においては2010年には「単身世帯」が「夫婦と子世帯」の抜いて最も多い世帯構成となり、2035年には単身世帯が4割弱をしめることになると予想されている。また「夫婦のみ世帯」の増加も増えており、子を持たない夫婦が増えたこともあるが、子が独立した後に高齢夫婦だけで暮らす世帯が増えたことが要因である。すなわち、このような世帯は近く「単身世帯」になる可能性が高い。西川裕子は夫婦を中心とした日本型近代家族と住まいの変遷について論じており、そもそも明治維新以降、西洋先進国においての近代国民国家の仕組みとしての家族制度を当時の国家体制に割り込む必要があったと記している。ｲｷﾞﾘｽにおいては19世紀中頃以降の「English Housing　Reform」、Henry Robertsの「Model House for Four Families」を始めとして労働者階級の居住空間の改善と公衆衛生、健康に関しての改革が西川のいう家族制度、国民国家としての仕組みを支えた。さらにｲｷﾞﾘｽでは公衆衛生に関する法律の改正によってLondon County Councilによる公共住宅の供給が可能になった経緯からも居住空間と国民の健康との関係性は不可分であった。単身世帯が増える将来は確実でありながら、荒川和久の「超ソロ社会」でも触れらているが、独身で未婚であることは未だに個人に問題があると捉えられたりﾏｲﾉﾘﾃｨとして理解される。また、独居高齢者に限らず、一人で食事することは相対的に不健康であると考えれれている。しかし、単身世帯の増加、高齢化の社会的背景の中、必ずしもひとりで暮らすこと、食事することが否定的に捉えられるべきでなく、居住空間としての「家」と世帯としての「家族」の捉え方の更新が必要なのは明らかである。本研究では特に健康、すなわちWellbeingである生活を送るための基礎である「食」の習慣と空間を研究対象とし、孤食（ひとりでの食事）の空間を調査の発端とする。また、孤食と共食（食事を他者と共にする）は不可分の事象でもあり、双方を連続した空間と捉えることで、建築計画学的、ｲﾝﾃﾘｱの配置や環境によるによる豊かで健康的な食の空間の獲得に還元できる研究成果を目指す。加えて、Social Dininig・Eating等に見られる本来家庭内で行われていた活動を新たな共同の場と捉え、その空間の創造はソーシャル・キャピタルを強化することであり、特にシェアキッチンやコミュニティキッチンでは「調理」を食を得る手段から参加者による共通の目的へとシフトさせることにより、より一層のソーシャル・キャピタルの強化が期待される。シェアキッチン・コミュニティキッチンを施設、コミュニティ内での社会的、空間的な位置付に着目して、共同作業や社会的活動としてのキッチンにおいて、「家族」の枠組みにとらわれない健康的な住環境創造につながる研究成果を目的とする。

過去2年間はCOVID19による外出自粛により高齢単身世帯だけでなく、若い単身世帯においても孤食の機会が増え将来的にもﾘﾓｰﾄﾜｰｸの推進等により孤食は増えると考える。

南後由和の「ひとり空間の都市論」においてもおひとりさまの食事空間を始めに取り上げ、都市の中でのおひとりさま空間を論じている。また、都市空間に注目した実践的な事例として、南後は黒澤隆の「個室郡住居」と黒川紀章の「中銀カプセルタワービル」をｹｰｽｽﾀﾃﾞｨに世帯としての住宅、居住空間の特質を一都市居住者である独立した「個」の観点から記述している。一方、本研究でも空間を研究対象にするが、19世紀のｲｷﾞﾘｽを始め各都市でそうであったように、公衆衛生やWellbeingと居住空間、特に食空間を関連付ける研究とすることで先行する「ひとり空間」に関する研究事例とは異なる空間論となる。孤食・共食に関する研究は足立己幸による国内外ともに学問的なｺﾝｾﾝｻｽを得た研究、実践例も少なく、孤食空間と共食空間に関する研究としては先駆的になり得る。

（2）実施計画の大綱

本研究は基礎研究を目的としており、孤食の場となる個室やシェアキッチン等の実空間の調査・ドキュメンテーション（写真撮影や実測を含む）を第一段階とし、調査で得られたデータをもとに、空間の平面計画、ダイアグラム化とともに空間のマテリアル特性を抽出する。特に孤食と共食（食事を他者と共にする）空間を比較対象とすることで相対的な空間分析を行う。孤食・共食空間の双方を空間的に類型（タイプ別）に分けることで、孤食・共食空間を占有する調査対象者の利用状況、感情等の定性的な調査と関連付けを明確にする。

調査対象の施設、コミュニティへのアンケートやヒアリングでは孤食時の精神的不安定感を和らげる、生活意欲、食事の質の向上に関連する類型の調査、分析を行う。

2022年内にオーストラリア、アデレ･ドのFlinders大学、John Coveney氏と共同で「What's on a plate」と第したシンポジウム（もしくはWebinar）を計画しており、高齢化する社会において10、15年後の食を想定したテーマで環境、栄養、技術、人口といったサブテーマを設け議論する。当該研究においては本シンポジウムを通じて海外での孤食、共食の実態およびシェアキッチンの発展、社会的意義を日本におけるそれらと比較する。

また、研究者グループは英国ロンドンのMuseum of Homeにおける「オープンキッチン」と第したパビリオン且つコミュニティキッチンを計画しており（コロナにおいて2022年の予定が延期されている）、当該研究で行う基礎的研究から発展的研究、実践的研究へとつなげることを予定している。

具体的には以下の4つのステップに分けることができる。

（1）第1段階として文献や自治体の資料より、訪問調査対象となる子ども食堂、地域食堂、シェアキッチンを抽出。

（2）子ども食堂、地域食堂、シェアキッチンを対象に孤食・共食空間に関する訪問調査（第1回）を行う。具体的には従来の実測や写真での調査に加えて、3次元スキャナ（Matterport Pro2）を利用した実測と空間のデジタルデータとしての取得を行う。

（3）上記で得られたデータをもとに、平面図、空間のダイアグラム、マテリアルや特徴的な物品の抽出を行う。これらは、CADやその他の描画ソフトおよびスケッチ等でまとまられる。さらに、空間やマテリアルを類型（タイプ）別に分類する。

（4）Wellbeingにつながる空間の抽出を訪問調査（第2回）にて行う。具体的には1回目の訪問調査では空間を調査の対象としたが、2回目ではインタビューや食に関するプログラムを通じて、孤食空間においての食事時間帯の空間構成、マテリアリティの特徴を抽出。

（5）上記の4で得られてたデータの比較対象としてオーストラリア、アデーレ･ドにおける高齢者施設等にてインタビュー、および食に関するプログラムの調査を行う。特に、シェアキッチンを利用した参加型の社会プログラムと共食、孤食空間の利用実態を調査する。これらはシンポジウムと同時期に行うことを予定しており、シンポジウムでは上記の（1）～（3）の実測をから得られたデータ等を中間成果としての発表をし、フィードバックを得ることを計画している。

（3）研究成果の公表予定

第1にはFlinders大学、John　Coveney氏と共同で計画しているシンポジウム（もしくはWebinar）において本研究の中間時の発表が見込まれている。特にCOVID19の影響で食事を共にする機会が少なくなり孤食が増える中、John　Covney氏の研究ｸﾞﾙｰﾌﾟでは食事の形態や空間が変わりつつと考えている。Webinarはこれらの状況と未来への示唆を含む内容となり、複数の関連する研究者、実務者を参加者として想定している。

加えて、オーストラリアで開催される国際会議Dietitians　Australia（2023年開催予定）へ食空間へのアプローチとして本研究の成果を発表予定している。

住環境、建築関連への研究結果の発表予定では、本研究の内容はUrbanismとの関連が深く、ｵﾗﾝﾀﾞを拠点としているUrbanismの雑誌「Monu」への投稿を検討している。また、3次元スキャナを用いたドキュメンテーション、図版をともにした研究成果が見込まれ、これらは英国AAｽｸｰﾙのｼﾞｬｰﾅﾙであるAAﾌｧｲﾙ、RIBAジャーナル等への投稿を検討している。

また、本申請対象の研究は研究後に計画されているMuseum　Of　The　Homeでの「オープンキッチン」ﾊﾟﾋﾞﾘｵﾝへとの関連性も深く、ﾊﾟﾋﾞﾘｵﾝ設置と並行して、Museum　Of　The　Homeにて本研究で得られた研究成果の発表および英国での同様の研究への発展を見込んでいる。（Museum　of　Homeの所蔵品は住環境に関連性が深く、かつ研究成果を広く公表する意味では公共ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑでの発表やMuseumおよび大学を始めとした近隣の研究機関と共同の発表機会を検討を重ねていく次第である。）

調査研究

■主題

奄美群島喜界島における集落とサンゴ礁の形成に関する研究 ―フィールドワークおよび模型制作を主軸とした建築学とサンゴ礁科学の共同実践

渡邊　剛

Tsuyoshi Watanabe

北海道大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門
講師
専攻分野／ サンゴ礁地球環境学

●共同研究者
山崎 敦子
九州大学大学院理学研究院 地球惑星科学部門
助教
小田切 駿
早稲田大学理工学術院総合研究所 招聘研究員
合同会社ガラージュ 代表社員
瀬尾 憲司
早稲田大学理工学術院総合研究所 嘱託研究員
合同会社ガラージュ 代表社員
渡辺 瑞帆
合同会社ガラージュ 代表社員

●研究課題

奄美群島喜界島は約12万年の時を経て海底のサンゴ礁が隆起してできた島である。現在も島の周りはサンゴ礁に囲まれ隆起し続けており、島全体の地質もサンゴ礁由来の石灰岩で構成されている世界的にも極めて特殊な性質の大地である。例えば、サンゴ礁由来の石灰岩は多孔質で水はけが良いため島には川が存在せず、代わりに断層から溢れる湧き水や豊富な井戸水を依り代に集落が構成されており、加工しやすい石のため風よけの石垣はすべてサンゴで構成されていたりなど、他には見られない特殊な風景が広がっている。

この島には7年前に喜界島サンゴ礁科学研究所が設立され、国内外から地質学や海洋学等を専門とした人材が集まっている。「サンゴ礁を100年後に残す」という目標のもと研究に取り組み、同時に島民と意見交換を重ねることで、環境的・経済的・文化的な観点において、持続可能な島の未来を模索している。

本研究では、上記の活動に建築学の研究員や学生をも巻き込み、地質学的にも建築学的にも特殊であるこの島の集落の調査を敢行する。集落の実測やサンゴの石垣の保存状態、井戸水の分布等の実地調査を行い、海水面の上昇や地球温暖化によるサンゴ礁環境の未来予測による地質学的・海洋学的な時間・空間のスケールを取り込みつつ、統計・図面・模型等の資料作成を行い、建築の周辺環境の持続可能な在り方を模索したい。

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

【背景・課題】―サンゴ礁に覆われた島の環境と現在の問題

奄美群島喜界島は約12万年の時を経て海底のサンゴ礁が隆起してできた島である。現在も島の周りはサンゴ礁に囲まれ隆起し続けており、島全体の地質もサンゴ礁由来の石灰岩で構成されている世界的にも極めて特殊な性質の大地である。例えば、サンゴ礁由来の石灰岩は多孔質で水はけが良いため島には川が存在せず、代わりに断層から溢れる湧き水や豊富な井戸水を依り代に集落が構成されており、加工しやすい石のため風よけの石垣はすべてサンゴで構成されていたりなど、他には見られない特殊な風景が広がっている。また、ミネラルが豊富なその地質はサトウキビの成長にも寄与し、食文化に繋がる側面もある。

しかし近年、地球温暖化等の影響でサンゴに変質が起こり、海の生態系の変化が懸念されている。それに対してこの島には7年前に喜界島サンゴ礁科学研究所が設立され、国内外から地質学や海洋学等を専門とした人材が集まっており、「サンゴ礁を100年後に残す」という目標のもと研究に取り組んでいる。

またこの島の集落では、人口減少による労働力不足や経済的な衰退により、昔ながらの石垣の保存や空家の維持が難しくなっているような問題が起こっている。

【目的・意義】―海と陸の両側の視点から考える

サンゴ礁という特殊な地質が全体を覆っているこの島では、1)地球温暖化等によるサンゴの変質とそれに伴う海の生態系の変化、2)気候変動や人口減少による人間社会の衰退という、海と陸地がそれぞれ抱える問題が連続的に影響し合っている。

本研究の目的・意義は、地球環境や人間社会の変化に対して、海と陸が共生していくための持続可能な集落や海辺の在り方＝建築の周辺環境のデザインの方法を模索することである。

【独創性】―サンゴ礁科学と建築学の共同

海においてはサンゴ礁科学が、陸においては建築学や文化人類学のような領域において個別の既往研究はあるが、本来はひとつながりである海と陸地の両側を横断するような視点の研究は少ない。本研究の独創性は、サンゴ礁科学と建築学の研究者及び学生が共同で調査・議論をし、さらにそれを住民に開いていくことで、海と陸を一体的に捉えながら、人と自然が共生する未来について模索するところにある。

【研究手法】―模型制作を媒介にした研究者と住民のワークショップ

本研究における具体的な手法は、下記の通りである。

すべての作業はサンゴ礁科学と建築学の両方の研究者及び学生によって行われる。

1)集落の民家や石垣の実測調査・材料の成分調査・湧き水や井戸の分布調査・地盤調査等
2)住民へのインタビューによる集落の環境調査
3)島全体や集落単位を模型化し、建築学的調査とサンゴ礁科学及び地質学調査による情報をプロット
4)情報が集約された模型をもとに、過去の集落の構成原理を分析する
5)模型を取り囲み研究者・学生・住民の間で意見交換を開き、これまでの島の記録を振り返りつつ、集落の環境デザインの在り方について議論するワークショップを開催
6)空家の利用、石垣の保存・修復等を含めた空間設計を提案する

上記のような建築学的アプローチに加えて、海水面の上昇や地球温暖化によるサンゴ礁環境の未来予測による地質学的・海洋学的な時間・空間のスケールを取り込みつつ、統計・図面・模型等の資料作成を行い、建築の周辺環境の持続可能な在り方を模索したい。

(2) 実施計画の大綱

本研究は、私たち共同研究者に加えて、インターンシップとして募集する建築学生と、喜界島サンゴ礁科学研究所に滞在する研究者及び学生の共同によって行われる。

2022年4-6月：既往文献等の予備調査
2022年7月：学生インターンシップの募集　　フィールドワーク及びワークショップの計画
2022年8月：研究者と学生によるオンライン共同ゼミ　　フィールドワーク及びワークショップの計画
　　地図・ダイアグラム・模型表現の調査及び検討　　サンゴ礁科学の既往研究調査
2022年9月：喜界島サンゴ礁科学研究所に滞在(1ヶ月)　　集落の実測調査・住民のインタビュー及び記録
　　模型ワークショップの実施・記録(写真・映像の撮影)
2022年10-12月：調査のまとめ / 地図・ダイアグラム等の資料作成 / 写真・映像の編集
2022年1-3月：報告書の作成

(3) 研究成果の公表予定

2022年
喜界島サンゴ礁科学研究所及び合同会社ガラージュのウェブサイト、またはSNS等のメディアにおいて、調査研究の過程やワークショップの様子を適宜公表する。
2023年
日本建築学会大会等の建築学分野の学術的な場において、成果報告をパワーポイント、梗概、あるいは動画にまとめ、発表する。(国内)
2023年
日本地球惑星科学連合大会(JpGU)、日本サンゴ礁学会(JCRS)等のサンゴ礁科学分野の学術的な場において、成果報告をパワーポイント、梗概、あるいは動画にまとめ、発表する。(国内)
2023年
American geophysical union (AGU Fall meeting)、国際サンゴ礁学会(ICRS)等のサンゴ礁科学分野の学術的な場において、成果報告をパワーポイント、梗概、あるいは動画にまとめ、発表する。(国外)
2023年
喜界島サンゴ礁科学研究所、合同会社ガラージュのウェブサイトにて記事を掲載。
2023年
都内及び喜界島にて記録映像の上映会を開催。
都内にて成果報告のための展覧会を開催。
喜界島にて模型を含めた成果報告のための展覧会を開催。

調査研究

■主題

スペイン都市計画の源流に関する研究
～小広場の分散配置による多様性の創出～

加嶋 章博
Akihiro Kashima

摂南大学 理工学部 建築学科 教授
専攻分野／都市計画・都市デザイン（都市計画史）

●研究課題

本研究は、都市計画大国スペインに着目し、近代都市計画の源流にみられる特徴を明らかにするものである。「都市計画」という概念が未だ確立していない初期近代、すなわち16世紀以降近代までのスペイン都市計画に、既に今日的視点でもある「多様性の創出」という観点を位置付けることが本研究の目的である。とりわけ、都市計画における「小広場」に光を当て、その大きな役割を、初期近代、近代、現代の都市計画史に共通するものとして位置付けたい。申請者の視座は、初期近代以降、均質空間を理想としたスペイン植民都市の計画理念に、実は多様性を創出する意図があったというものである。

本研究で具体的に重視するのは、小広場を分散配置し、時代社会に応じた施設や諸活動を隣接させることで、都市に多様な「界隈」を生み出すという姿勢である。この観点をスペイン都市計画の源流に見て取る作業は、スペインのみならず、初期近代以降の都市計画史研究において、重要な役割を担うものと考えられる。

■研究計画の概要

(1) 研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

○初期近代および近代都市計画の連続性

申請者は、初期近代の時代以降、既に多様性の創造という目標が都市の計画に芽生えていた、という仮説を立てている。これを象徴するのが、スペイン都市計画の源流、すなわち植民地時代の都市計画手法である。図のように申請者は、スペインにおける初期近代および近代都市計画思想の連続性、ならびに、その都市計画の源流に「多様性の創出」という概念が読み取れるという視座をもっている。本研究は、「都市計画」や「グリッド」という概念や言葉が未だ確立していない初期近代におけるスペイン都市計画の源流において、多様性の創造という特徴があることを明らかにするものである。

○「多様性の創出」という視点

スペイン都市計画の源流とは、16世紀国王フェリペ2世の植民地の都市計画法をはじめとする都市計画の手法である。申請者はこれまで、主要広場を据えた都市核により都市の求心性を保つ計画技術の存在を明らかにしてきた。本研究では、さらに、小広場の分散配置を通した多様性の創造という視点を検証したい。

○小広場の分散配置と都市の多様性創造

16世紀スペインの都市計画手法には、小広場を都市に分散配置し、そこに教会や市場を隣接させていくことで、都市に多様性のある「界隈」を生み出そうとする視点が読み取れる。初期近代の都市計画手法に、多様性の創造という視点を導入する点は本研究の独創性かつ大きな役割といえ、ヨーロッパ近代都市計画史の更新という波及効果も見込まれる。

図：申請者の研究視座

(2) 実施計画の大綱

本研究は、大きく以下の三つのStepにより実施する。

Step①：初期近代（16世紀）の都市計画に関するテクスト資料、イメージ資料の選定

スペイン初期近代における都市計画に関する史料から、都市計画や小広場の配置など、多様性の創出に関わる計画規範が読み取れる史料を抽出する。対象とする史料は、国王指示書、フェリペ2世の勅令といった《テクスト資料》、都市レイアウトや施設配置を表した都市計画図などの《イメージ資料》の両方とする。植民都市に関する都市計画資料は主に「国立インディアス総合文書館」を、初期近代の国内都市計画事例については「国立シマンカス総合文書館」の都市計画関連の所蔵セクションを中心に行う。同様に、最初期の主要広場整備事業である16世紀バジャドリッド市のプラサ・マヨール計画ならびに小広場の整備に関する資料を収集する。

Step ②：小広場の計画特性の抽出と図式化

Step①で得た資料を対象に (1)広場の階層化（主要広場と小広場）、(2)配置計画（小広場および主要広場）、(3)都市施設の併設（広場に併設される宗教施設や行政施設等）、(4)活用形態（経済、宗教、政治活動等）の視点から小広場の具体的な計画意図を分析し、計画特性を抽出し、可能な限り図式化し、事例ごとにカルテ化を行う。都市に多様性を創出する都市計画技術としての小広場の役割と計画手法を明確化する。

Step③：初期近代、近代の都市計画が連続性を有することの証明

Step②と同様に、スペイン近代における典型的な都市計画事例（バルセロナ市をはじめとする19世紀後半の都市拡張計画）から、小広場の計画特性を抽出し、可能な限り図式化し、事例毎のカルテ化を行う。これらを初期近代の特徴と比較し、その類似度等から初期近代から近代への都市計画の連続性を評価判断する。また、小広場の分散配置による多様性の創出という視点から、現代にまで継承された都市空間（バルセロナ市、ジローナ市）における小広場の役割を考察し、初期近代、近代に加え、現代の都市空間にまで連続性を見て取れることを考察する。

(3) 研究成果の公表予定

初期近代の都市計画の特徴や小広場の分散配置が生み出す都市の多様性について、査読論文にまとめる。国内学会では日本建築学会（査読論文、口頭発表）、日本都市計画学会（査読論文、口頭発表）による公表を、国際学会ではIPHS国際都市計画史学会（査読論文、口頭発表）での公表をそれぞれ予定している。

スペイン都市計画の源流から読み取れる特徴は、初期近代、近代、現代の都市計画の連続性を説明するものとして、可能な限り図解や映像を交えた解説を用意し、これをホームページで公開する。用いたすべての一次史料についての解題も行う。

これらの成果は、わが国の都市計画や都市デザインにおいても、都市空間資源活用の観点から小広場整備に資するものと考えられ、一般向けの解説書（「(仮)スペイン近代都市計画史にみる小広場の誕生」）を準備し、公開を加速したい。

調査研究

■主題

戦後大阪における工業化住宅の構造・設備・内装等及び電化製品の発展史の研究展示

植木 啓子

Keiko Ueki

大阪中之島美術館　学芸課長
専攻分野／デザイン史　歴史社会学

●共同研究者
清原 佐知子
大阪中之島美術館　学芸員　近代美術史
北廣 麻貴
大阪中之島美術館　学芸員　デザイン史

●研究課題

・2014年より推進してきた戦後1950年代から2000年までの関西・大阪を中心とした工業化住宅及び民生用電化製品に関する資料情報収集と分析、および材料や加工を含む造形に軸足を置いた工業・住空間デザインの発展の研究（インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト、略称：IDAP）を活かし、2022年8月から10月の予定で開催される展覧会「みんなのまち　大阪の肖像」第２期において、工業化住宅の実物大模型を設置し、構造・設備・内装再現展示、家電製品の実物展示を実施する。

・上記の取り組みを大阪・関西の歴史的文脈や造形発展史のなかにおき、大阪中之島美術館に所属する美術・デザイン史を専門とする学芸員に加え、工業化住宅や工業製品デザインの現場に携わった経験を持つ外部研究者とともに、戦後大阪の都市・生活文化全体を描き出し、専門的な研究成果を広く一般に紹介し、工業化住宅及び家電製品の歴史文化的意義への認識・評価を高める。

■研究計画の概要

（1）研究の目的及び意義とくにその特色とする独創性

【目的】

本研究（IDAP）は、戦後の関西、特に大阪の主要産業でもあり、特長・文化でもある①家庭電化製品、②工業化住宅、③住宅設備及び建材を対象に、製品や設備・建材自体とその開発・デザイン経緯や背景にかかる情報・資料の収集を行い、整理・公開し、今後の幅広い研究のリソースとして提供することを長期的な目的に持つ。その視点は、工学的な意味や技術としてのデザインではなく、基本的には、所与の技術や機能に形を与え、造形的な質の差異を生み出す「デザイン」にある。

投じられた革新的な発想や創造力は相当な大きさであったと推測できるにも関わらず、基本的には消費財であり消耗品である工業製品や設備・建材は、文化価値を有するものとして保存や記録の対象とならず、開発者や製品自体から得られただろう貴重な情報の多くが、すでに失われつつある。本研究は、その試みを普及することによって、工業デザインにかかる「歴史の収集と保存」への気運を醸成することを、間接的ではあるものの大きな目的としている。

2014年から継続してきた本研究が当初から目標としてきたのが、集積された情報を戦後関西・大阪の歴史及び文化的な業績として、実際の製品や設備・建材をもって一般に提示し、「体験」としてその価値への認識を深めてもらう機会であり、研究発足から８年度になる来年度において、この目標を実現することを最重要の目的とする。

【意義と独創性】

パナソニックやシャープ等のメーカーや大学等の研究機関、そして大阪中之島美術館が会員として組織するインダストリアルデザイン・アーカイブズ協議会が推進するインダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト（IDAP）は、企業が保管する自社製品やサービス、開発プロセス等の情報を集約し、工業デザイン情報のプラットフォームとして機能することをめざしている。2014年からの活動のなか、2018年には、インフィル分科会を設置し、それまで対象としてきた家電製品（アプライアンス）に、住宅設備・建材のインフィルを加えて、情報収集範囲を拡大した。この試みは世界に類を見ないものであり、情報の収集・蓄積も進んでいるものの、研究リソースの公開と提供という点では、マンパワーや研究資金の不足、加えて昨今のコロナ禍の影響を受けて、遅延が顕著であるという課題がある。しかし、過去7年間の活動において、本研究への注目は徐々に高まっており、事務局を担う大阪中之島美術館の特長ある活動のひとつとしての認知も進み、来年度の戦前・戦後を俯瞰する大阪をテーマとした包括的な展覧会において、その核となる展示内容のひとつとして本研究の蓄積を提示することは、専門的分野における評価を超えて、一般への周知・普及に大きく資するものであり、今後の研究の発展に重要な意味を持つものである。

（2）実施計画の大綱

【2022年度上半期】

・展覧会及び展示内容の企画・準備：
①1970年を工業化住宅の重要な転換期とし、70年代前半をテーマに工業化住宅の実物大模型の基本・実施設計、及び内装材・設備の意匠検討
②上記の製作、及びそれを核とした展覧会全体の構成と製作
③住宅と共に展示する、家電製品の所在調査、構成、及び借用手配
④展示内容の解説等の作成
⑤さらなる普及のための、トークイベントやワークショップの企画・準備
・展覧会の開催：「みんなのまち　大阪の肖像」第２期：昭和戦後・平成・令和「祝祭との共鳴」
会期：2022年8月6日(土)– 10月2日(日)
主催：大阪中之島美術館、NHK大阪放送局
＊参考：「みんなのまち大阪の肖像」第1期（戦前編）は2022年4月9日～7月3日の開催

【2019年度下半期】

・展覧会撤収、製品返却、実物大模型の活用にかかる検討
・展覧会の振り返りと検証
・製品データベースの構築のための情報整理
・オーラルヒストリー集出版に向けた準備

【これまでの経緯と2022年までの計画】

・2014年度：産学官連携事業としてインダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト（IDAP)発足
・2015年度：第1回公開ディスカッション開催
・2016年度：デジタルアーカイブ試行版公開、第2回公開ディスカッション（国際シンポジウム）開催
インダストリアルデザイン・アーカイブズ協議会設置（事務局：大阪中之島美術館）
・2017年度：オーラルヒストリー報告書1号発行、第3回公開ディスカッション（シンポジウム）開催
・2019年度～2021年度：デザインアーカイブにかかるトークイベントの継続実施（国際シンポジウムを含む）／研究協力者による研究成果の学会発表
・2022年度：展覧会及び関連トークイベントの開催

（3）研究成果の公表予定

2014年からの継続的な取り組みとなるインダストリアル・デザインアーカイブズ研究プロジェクトの第一段階の集大成として、展覧会における実物展示を実施し、その内容を、プレスリリース、告知印刷物、大阪中之島美術館ホームページ及びSNSにて公開し、また、展覧会開催時には、一般の参加者を募り、OB・現役交えて、工業化住宅や家電製品の開発者やデザイナーを招き、企業利益目的ではない文化的な文脈におけるメーカーを横断したトークイベントや講演を実施する。

さらにその内容は、展覧会後もインダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクトの特設サイト（https://nakka-art.jp/idap/）において報告し、本研究の実績として継続的に公開する。展覧会後の本研究の次の目標は、製品データベースの本格的運用と開発者オーラルヒストリー集の出版に移るが、展覧会を実施することによって、本研究の内容により一般的な関心が寄せられることに期待し、データベースやオーラルヒストリー集への注目が高まるよう注力していく。

国際交流

■主題

建築学生ワークショップ宮島2022の開催

平沼 孝啓

Kouki Hiranuma

特定非営利活動法人アートアンドアーキテクトフェスタ
代表理事
専攻分野／建築デザイン

●活動の趣旨

建築や環境デザイン等の分野を専攻する大学生を対象にした、地域滞在型のワークショップです。原寸の空間体験ができる実制作を行い、公開プレゼンテーションも行います。

1.学生のための発表の場をつくる
2.教育・研究活動の新たなモデルケースをつくる
3.地球環境に対する若い世代の意識を育む
4.地域との継続的な交流をはかる　ことを目的としています。

国内外から注目される教育研究活動として質の高いワークショップを目指し、特殊な地域環境での製作体験を数か月にわたる継続的な活動を前提として取り組むことで、地域に還元していくことができると考えています。

●実施時期

実施日程:
2022年6月11日　現地説明・現地調査、
7月16日～17日　提案作品講評会・制作打ち合わせ
8月23日～8月29日　合宿にて原寸制作、8月28日　公開プレゼンテーション

●実施場所

嚴島神社境内

■計画の概要

開催テーマ ：　“今、建築の、原初の、聖地から”
開催場所 ： 嚴島神社境内
合宿・制作場所 ： 営繕詰所（予定）
スケジュール ：

2021年	
09月21日（火）	参加者募集開始
2022年	
05月12日（木）	参加説明会開催（東京大学）谷尻誠
05月19日（木）	参加説明会開催（京都大学）前田圭介
05月20日（金）	参加者募集締切（参加者決定）
06月11日（土）	現地説明・調査
07月02日（土）	各班エスキース（東京会場）（大阪会場）
07月16日（土）	提案作品講評会
07月17日（日）	実施制作打合せ
08月23日（火）～29日（月）	合宿にて原寸制作ファイナル（6泊7日）
08月28日（日）	公開プレゼンテーション（1日間）
08月29日（月）	清掃・解散（1日間）

講評会および公開プレゼンテーション参加講師（予定）
建築・美術 両分野を代表する評論家をはじめ、第一線で活躍をされている建築家やアートディレクター、世界の建築構造研究を担い教鞭を執られているストラクチャー・エンジニアによる講評。また、近畿二府四県の大学で教鞭を執られ、日本を代表されるプロフェッサー・アーキテクトにご参加いただきます。
＜建築家＞村上徹、芦澤竜一、長田直之、平田晃久、平沼孝啓、藤本壮介、安井昇、安原幹、吉村靖孝　他
＜建築史家＞五十嵐太郎、倉方俊輔
＜構造家＞腰原幹雄、佐藤淳、陶器浩一、稲山正弘
＜美術評論家＞建畠晢、南條史生

■その他特記すべき事項

2010年9月「建築ワークショップ奈良2010」（奈良、平城宮跡）主催。
2011年9月「建築学生ワークショップ滋賀2011」（滋賀、竹生島）主催。
2015年8月「建築学生ワークショップ和歌山・高野山2015」主催。
2016年8月「建築学生ワークショップ明日香村2016」主催。
2017年8月「建築学生ワークショップ比叡山2017」主催。
2018年8月「建築学生ワークショップ伊勢2018」主催。
2019年8月「建築学生ワークショップ出雲2019」主催。
2020年9月「建築学生ワークショップ東大寺2020」主催。

国際交流

■主題

日本の伝統と技の継承と発展、
多様な芸術的表現による国際交流事業

倉島 美和子

Miwako Kurashima

KOSMOS実行委員会
専攻分野／インテリア・プロダクトデザイン

●活動の趣旨

事業は、日本の伝統文化の素晴らしさに現代的な解釈を取り入れて、国際的あるいは幅広い年齢層に発信することを目的とし、2件の国際展と1件の教育ワークショップを実施します。

●実施時期

1）フィリップ・ワイズベッカー展:虎屋京都ギャラリー（京都）令和 4年4月上旬 会期1週間程度予定
フランス人の感性を通した「伝統建築工匠の技」の理解とそのグラフィック的表現によって、日仏の文化的な国際交流と、アートとしての日本人への伝統技術の再認識の場を設ける。
2）フォールディング・コスモス展:ノグチ・ミュージアム（ニューヨーク）令和 4年年9月-令和 5年2月 5ヶ月間程度予定
国内の由緒ある神社や仏閣から贈られた88の木片から構成された幕末の探検家・松浦武四郎が残した最小空間の書斎を日本の伝統建築の技術で復元した精巧な模型を、日本の熟練した大工とニューヨークの大工の協働作業によって組み立て、イサム・ノグチの作品や日本の若手作家の現代美術との国際交流の場を設ける。また、7カ国を巡回した本展の国際交流も同時に行う。
3）伝統建築工匠と環境に配慮した再生木材を使用し、アーティストや学生と協働するインスタレーション及び講義:アンスティチュ・フランセ関西ー京都及び京都市内（京都）令和 4年10月第1土曜日を中心とした前後1週間程度予定
国内外のアーティスト、また甲南女子大、大阪工業大学、京都大学と連携し、木材による再利用可能な伝統建築工匠の技を取り込んだ連続する最小空間からパビリオンのインスタレーションを計画し、それぞれの内部で様々なメディアを駆使した国内外の学生やアーティストの作品を展示を国際交流を図る。

■計画の概要

・テーマ及び演題　前項目1-3）の内容に準ずる。

1）フィリップ・ワイズベッカー展：虎屋京都ギャラリー（京都）　令和 4年4月上旬 会期1週間程度予定
フランス人の感性を通した「伝統建築工匠の技」の理解とそのグラフィック的表現によって、日仏の文化的な国際交流と、アートとしての日本人への伝統技術の再認識の場を設ける。

2）フォールディング・コスモス展：ノグチ・ミュージアム（ニューヨーク）令和　4年9月-令和5年2月　5ヶ月間程度予定
国内の由緒ある神社や仏閣から贈られた88の木片から構成された幕末の探検家・松浦武四郎が残した最小空間の書斎を日本の伝統建築の技術で復元した精巧な模型を、日本の熟練した大工とニューヨークの大工の協働作業によって組み立て、イサム・ノグチの作品や日本の若手作家の現代美術との国際交流の場を設ける。また、7カ国を巡回した本展の国際交流も同時に行う。

3）伝統建築工匠と環境に配慮した再生木材を使用し、アーティストや学生と協働するインスタレーション及び講義：アンスティチュ・フランセ関西ー京都及び京都市内（京都）令和 4年10月第1土曜日を中心とした前後1週間程度予定
国内外のアーティスト、また甲南女子大、大阪工業大学、京都大学と連携し、木材による再利用可能な伝統建築工匠の技を取り込んだ連続する最小空間からパビリオンのインスタレーションを計画し、それぞれの内部で様々なメディアを駆使した国内外の学生やアーティストの作品を展示を国・際交流を図る。

・参加予定国　アメリカ・スイス・フランス・フィンランド・ドイツ・イギリス・スペイン等

・参加者見込み数　全プロジェクトを通して5000人程度

■その他特記すべき事項

本事業の基盤となる事業のURL
スペインでの展示　https://miesbcn.com/calendar/folding-cosmos/
出版　http://call-me-edouard.com/en/books/folding-cosmos-22/
フランスでの展示
https://maisonlouiscarre.fr/mlc/en/folding-cosmos/

在外研修

安達 麻耶

Maya Adachi

●受け入れ先と受け入れ期間
Harvard Graduate School of Design, Master of Architecture
2021年8月-2025年3月

●研修の内容と方法
2021年8月～2022年5月（1/4半期）
1.建築、設計の基礎を獲得する。（他の学生の多くは私と違い大学４年間建築を学んできた学生なので、理論的にも技術的にも追いつける様取り組む。）2. Harvard GSDのResponsive Environment and Artifacts Lab (略称REAL, 研究室の名前)にて活動できる様、研究室長Allen Sayegh氏の授業（高学年向けなので本来なら受講できない）を受講または聴講する。
2022年8月～2023年5月（2/4半期）
1.引き続き建築、設計について理解を深める。2.センサーテクノロジーを応用した建築デザインが既存の意匠設計とどの様に繋がりを持っていくことが出来るのか追究する。3.　2と同時に、センサーテクノロジーを必ずしも応用しない方法(デジタルの力を必ずしも借りない状態)での、低コストで豊かな住環境設計の追究
2023年8月～2024年5月（3/4半期）
1/4・2/4半期にて学んだことを活かしながら、上記に同じ　＋修士設計・論文準備
2024年5月～2025年3月（4/4半期）
修士設計、論文作成

■主題

公営住宅やシェルター、少年院等住む場所を選ぶことの出来ない人のための建築について追究していきたい。心理学やプログラミング、電子工学を学んだこともあり、一つのアプローチとして応答的環境(responsive environment)分野での研究を考えている。心理、視覚、聴覚などのデータをリアルタイムで建物環境に反映させることにより、将来的に低コストでその建物の目的に沿った環境（例えばトラウマ対処的な環境)を作り出す仕組みを模索していきたい。

■活動歴

<2022> Now What?! -Advocacy, Activism & Alliances in American Architecture since 1968 研究助手　<2021> Harvard Graduate School of Design "Dean's merit scholarship" (卒業までの学費全額免除), クマ財団クリエイター奨学金　(2021年4月-2022年3月), Massachusetts Institute of Technology (MIT) School of Architecture and Planning, Master of Architecture(学費75%)、Columbia Graduate School of Architecture, Planning, and Preservation, Master of Architecture ($20000/年) 等の建築修士課程に奨学金付き合格　<2020> Grinnell College Dean's List, University College London (UCL) Bartlett School of Planning Expo (学生代表作品としてポスター展示) <2019> University College London (UCL) Bartlett School of Architecture, Group Exhibition "Matter"　<2018> Grinnell College Dean's List <2017> Grinnell College Dean's List

在外研修

南　苑佳
Sonoka Minami

●受け入れ先と受け入れ期間
Konstfack　University of Arts, Crafts and Design
Master's Program in Design - Spatial Design コンストファック大学
令和4年5月～令和5年4月

●研修の内容と方法
5月～7月（1/4半期）
文献調査、ストックホルム中心地実地調査。現段階では、街のファサードを形成する窓から見えるインテリアとの関係を調べ記録していきたいと思っている。先行事例先行作品を研究する。また、コースの一部として大学院以外の他の企業や産業とのコラボレーションがあり、ここで他のデザイン分野のプロセスを学ぶ。
8月～ 10月（2/4半期）
夏季休暇にEU内の建築事務所にてインターン。また、スウェーデン以外の北欧・EU諸国への研究旅行。フィンランド、ノルウェイ、デンマーク、（＋スイス）を検討している。スケッチ、ドローイングとしてアーカイブすることを通して北欧・スウェーデンにおけるデザインの背景を理解する。
11月～ 1月（3/4半期）
研修の前半で得た知識やアーカイブをもとに実際に制作、設計を行う。
2月～ 4月（4/4半期）
設計した提案を展示会で発表する。また研修テーマを論文としてまとめる。在外研修のために滞在しているスウェーデンだけでなく、日本に向けてこの研修での成果を発表する場を持てるよう計画する。

■主題

自分の住む街に居場所を自覚するということについて。
気候や歴史的な街の成り立ちから建築の内外がはっきりと分かれている北欧諸国において、都市の外観を形成するランドスケープの一部としてのインテリア、生活空間の美学を研究、理解し、日本の都市空間における、身体的な活動が風景となる新しい建築のあり方を提案する。

■活動歴
2019年　camoudeco studio 結成
2021年　Konstfack Exhibition "Future Public/Public" 出展

デザイン賞

2022（令和4）年度顕彰事業

第29回　ユニオン造形デザイン賞

■テーマ

大きな家

大きな家を設計してほしい。

もちろん、単にサイズが大きい家を求めているのではない。サイズというよりも、存在としての大きさとか、その場所に引き寄せられる文脈の大きさというような意味で、「大きな家」を考えられないだろうか。

コロナ禍の制限で、多くの人が自分の家に閉じ込められるのを窮屈に感じただろう。何不自由なく日常生活を送れるはずの、さまざまな性能が整った住環境に恵まれてもなお、あるいはそれ故に、何かそこにある過不足なさに閉塞感を感じてしまうのかもしれない。

家というものが、単にそこに営まれる生活だけに捧げられた場所になるのではなく、もっとほかの何かにつながったり、何か大きなものを感じさせたりする場所にならない限り、この窮屈さはなくならないだろう。

おそらくこの先ますます求められるのは、過剰に高度に整えられた住宅ではなく、ここまで述べてきたような意味での多様な大きさを持った家なのではないだろうか。

ここでは、思考実験的に、それぞれが設定する何らかの「大きさ」に焦点を当て、現代の多くの住宅に欠落しているような豊かさを持った家を設計してほしい。未来を切り拓く多様な提案を楽しみにしている。

©Luca Gabino

審査員

平田 晃久 氏

Akihisa Hirata

●プロフィール

経　　歴

1971年大阪府に生まれる。
1997年京都大学大学院工学研究科修了。
伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所を設立。
現在、京都大学教授。
主な作品に「sarugaku」（2008）、「太田市美術館・図書館」「Tree-ness House」（2017）、「八代市民俗伝統芸能伝承館」（2021）等。村野藤吾賞（2018）、日本建築学会賞（2022）等多数受賞。
著書に『Discovering New』（TOTO出版）等。

■作品応募件数／180件

年齢別

年齢	人数
18～19	23
20～21	66
22～23	47
24～25	24
26～27	11
28～29	9
合　計	180

地域別

地域	人数
北海道	18
東北	12
関東（東京以外）	31
東京	36
北陸・信越	10
東海	14
近畿（大阪以外）	22
大阪	8
中国	15
四国	1
九州	12
その他	1
合　計	180

職種別　※無職・アルバイト・休学中含む

職種	人数
専門学校	15
短大・高専	13
大学	97
大学院	31
設計・デザイン事務所	9
フリー	15
合　計	180

審査講評

「大きな家」という、どのようにでも解釈できるような、簡単かも知れないけれど、ある意味では難しい課題に対して、多様な回答が寄せられて、非常に楽しく審査することができました。
大きくは二つぐらいの傾向に分かれていたかなと思っています。
第一の傾向は住宅というものを、単純に建物に限定せず、環境を含めた大きなものとして、再定義するようなタイプの案で、金賞/早坂愛佳さんの案、佳作A賞/野中郁弥さんの案、佳作B賞/西尾依歩紀さんの案、佳作C賞/岩下隆平さんの案といったものが、そのような傾向になるかと思います。
第二の傾向は、単体の建築であったとしても、非常にユニークなアプローチで、その建築の中に多様な大きさを内包しているような形の提案で、銀賞/服部圭佑さんの案、佳作A賞/杉山峻涼さんの案、佳作B賞/宮本皓生さんの案、佳作C賞/後藤樹也さんの案といった作品がそうした傾向になるのかなと思います。
第一の傾向を代表する案として、金賞の「川を守る者たち」という早坂愛佳さんの提案が挙げられます。これは川の堤防みたいなもの、今までそれが土木的な構築物で、住宅というものとか、その建築というものと完全に分かれている存在だったものを、もうちょっと川の流れの中に、住む場所というのが半分挿入されて行って、半分溶けあったみたいな関係になっているような提案です。川というのは、氾濫した時にものすごく暴力的なものにもなり、ある意味怖いものですので、なかなかそういう勇気のある提案というか、本当にこれが実現可能かというと、色々な意見があるかも知れません。でも、もしかしたらその堤防的なるものというのも、もっと壁を持った空間、具体的な人が普段はここで多様な形で生活できるような場所であったとしても、それでも楽しくなり立つし、自然というものと人の住む場所、あるいは人工的に開発していくような場所との境界線が、もっと多様であり得る、それが、大きな意味で家と言えるような場所になるのではないか、という予言的でもあるような提案です。この配置図の絵などは非常にインパクトがあるというか、面白いイメージを掻き立てるものだったと思います。また、この考えの根っこにあるもっと混ざり合う自然と人工というか、人工物も自然ももしかしたらもっと一体的なものなのではないか、ということを想像させる考え方というのは、これからの建築を変えていくような一つのきっかけをつくるのではないかと思い、あえて高く評価しました。
それから、単体の住宅というか、建物的に捉えるという第二の傾向の中で、服部圭佑さんの「3センチの空をつかまえる家」というのを銀賞に選びました。これは非常に単純な案で、ビルとビルの隙間にアルミのような反射性の壁を立て、空の色で満たされたような、細長い井戸のような空間を作るのですが、その空間の一番ボトムには、ビルの隙間で定義された少し凹凸のある形の空間があって、その空間に空が降ってくる、そういう場所で生活してみたいなと非常に思わせる、狭い隙間なのですが、その狭い隙間がもっと大きなものに繋がって、普段感じることができないような広がりを持つというアイデアは、ありそうでなかったものだと思います。その点で非常に想像力を掻き立てられましたので、その点を評価して銀賞にしたいと思いました。
銅賞の「批評するキリン」の坂野修平さんは、第一と第二の傾向に整理され切らないような、かなりユニークなアプローチをされている方でして、キリンが飼われている囲いの中に、自然を模したような人間の家が、さらにその中に入っている。どちらが囲いの中に入っているのか、また、どこからが自然でどこからが人工なのかが、わからなくなるような仕掛けそのものを「大きな家」として提案されています。家というのは、自然の中にある人間のための住む秩序みたいなものを作るものなのだとすると、それが幾重にも反転されると言いますか、そういうことが一体何を意味しているのかという、ある意味で哲学的な問いを誘起するような作品で、グラフィカルな表現も非常に美しくて、興味深い問いを発しているおもしろい案だと思って、これを銅賞と致しました。

あと順番に佳作の作品を紹介します。
佳作A賞/杉山峻涼さんの「大きなおだんごの家」。これは単純に、お団子のような平面形をしたスラブのようなものが、住宅の真ん中に挿入されているというだけの、単純なアイデアなのですが、そういう不思議なカタチの空白があることによって、モノに満たされた、アフリカの雑貨屋さんのオーナーが住む家なのですが、そこに不思議な広がりが生まれていて、この空白によって生まれる広がりというのが、このままこれを作っても十分建築作品として成立しそうな気配も漂わせていて、ユニークな案として高く評価できると思いました。
佳作A賞/野中郁弥さんの「船を造ること、海を使うこと、街を育てること　―造船業がつくる新しい大きさの中に暮らす―」ですが、これは住宅というものを、もっと大きなものとして、これは瀬戸内の造船業を営むしまなみ海道にある一角を、海の広がりと言いますか、造船業で結ばれた一定の海のまわりの場所、それら全部が一つの家なのだという話になっています。こういう何かをつくった産業みたいなものと結びついたかたちで、たくさんの人々が生きているということを、家と定義づけるという見方は、非常に現代的だと思い高く評価しています。一方で、その中に劇場として提案されている、実際の浮かぶ船のような建築の提案、これがもう少し具体的かつ魅力的であったとすれば十分、金賞を狙えるような枠組みの思考が提示されていたと思いますが、そこが少し惜しかったと感じています。
佳作B賞/宮本皓生さんの「うつろいの映写機」ですが、これは、代々木の高層ビルに囲まれた谷間にあるような低層住宅地域に、あたかも一つの映画のシーンがずうっと折りたたまれたような住宅をつくっています。これは住宅というよりも、経験の装置のようなものでもあるのですが、街の中に色んなシーンで出てくるようなありふれたものたちや、このユニークな場所から見える風景の切り取られた窓だったり、さまざまな形でそうしたその要素というものが一本の映画のように繋がれている。それが割とユニークなかたちで結実していて、住宅なんですけれども外側にあるものが何か写し込まれたような、そういう広がりを持っているという意味で、面白い試みなのではないかという風に感じました。
佳作B賞/西尾依歩紀さんの「溜(タ)め家(イエ)　―ため池と共に生きる大きな家の提案―」なんですが、ため池の水が満ちたり引いたりとか、さまざまな季節によって変わるため池の様相を、上手く生かしながら生きていくような一連の工房も含めた様々な人たちが一緒に住むような、共同体のための家のようなものを非常に丁寧に計画されていました。これは建築的にものすごく単体の建築の在り方が興味深いというよりは、この丁寧さとこの場所の関係というのを緻密に考えている姿勢は、好感をもって見ることができました。
佳作B賞/野中美奈さんの「みんなでつくる大きなおうち―技によりお互いを尊重し、みんなを受け入れる―」という作品ですが、これはある意味で大きなものを、一つの家として呼び込んでいる第一の傾向に属しながらも、第二の傾向でいわれているような、一つの家としての単体の建物としてちゃんと再解釈していて、その意味では、２つの傾向が一つに融合した、非常に優れた作品だといえるかも知れません。それはどういうところに表れているかというと、この住宅自身が、モノづくりをする人々がそれぞれの技を発揮したり、他の人に教えたりすることができる場所を内包して、一つの大きな屋根で統合されたような住宅になっていると同時に、ダイヤグラムでも様々な人々の関係が立体的に大きなサイクル、小さなサイクルが重なり合った、複数のサイクルが重なり合うものとして、イメージ、提案されているということが、非常に優れていると思いました。一方で、建築としてのユニークさという点では、若干、表現として弱い部分もあるかなと感じました。
佳作C賞/岩下隆平さんの「境界線に屋根をかける」という作品。これは非常に素直に、街の中のそれぞれの住戸に、少し道路にはみ出した公共的な縁側のようなスペースをたくさん設けて、それらが全ての人々にとっての公共の家のようなものになるという提案で、わかりやすくて、しかもそれぞれの縁側がユニークかつ丁寧にデザインされていて、好感を持つことができました。ただこのような提案が、他のコンペティションなどで全く見ないものかというと、そうでもないところもあるので、丁寧さという意味では高く評価しつつも、佳作ということになりました。しかし非常に優れた表現であるとも思います。
佳作C賞/後藤樹也さんの「不完全が生む寛容な家」。こちらは、住宅というものが、完全に生活をきちっと定義づけるものである窮屈さを超えるような、不完全さというものをテーマにしている。このテーマの設定が非常に面白くて、階段の不完全化とか、屋根の不完全化とかという言葉が、非常に想像力をそそるものだったと思います。一方で、本当にそういう不完全化が進んだ住宅というものが、もっと多様にデザインされていれば、もしかしたら金賞銀賞レベルの作品になり得たかもしれないのですが、少し抽象的な表現にとどまっているのが、グラフィカルには美しい表現であるとは言え、最終的には佳作という事になってしまったのかもしれません。ただ非常に面白い問題提起であるという事はいえると思います。

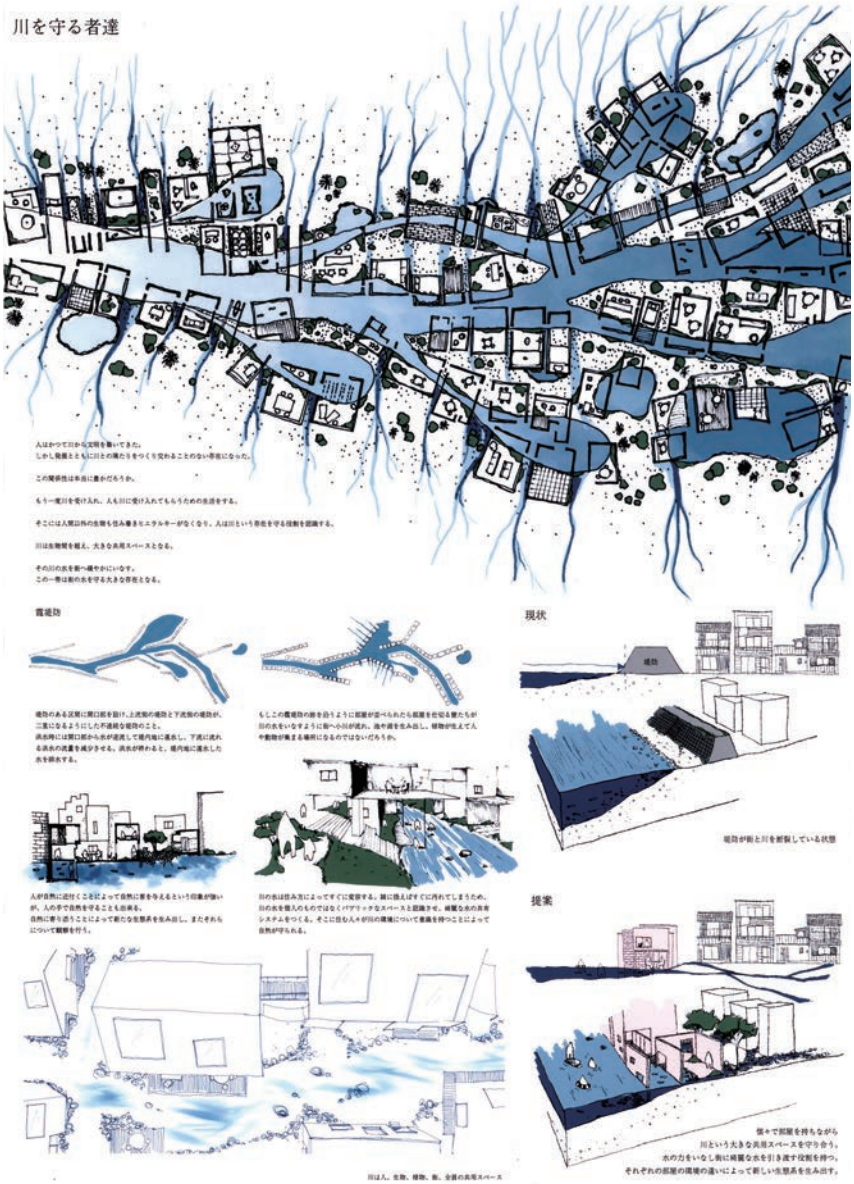
このようにたくさんの面白い作品の中から、１０点を選ぶのも非常に難しい作業でしたが、それに、もしかしたら僕が審査の中で完全に理解することができなくて、読み切れなかった部分がある作品が他にもあるかもしれないという、少し後ろ髪惹かれるような気持ちもあるのですが、しかしながら特に金賞、銀賞、銅賞の作品のような非常にユニークな問題設定や、鮮やかな回答に出会えたことは、今回非常に印象的でしたし、自分がこれから住宅にせよ大きな建築にせよ、様々なタイプの建築を創っていくときに、ここに示された思考の広がりというのは、僕にとっても非常に面白いものになったという風に改めて感じています。

デザイン賞　金賞

川を守る者達

早坂 愛佳　（20歳）
Manaka Hayasaka

東北芸術工科大学
デザイン工学部
専攻分野／
建築・環境デザイン学科



人はかつて川から文明を築いてきた。
しかし発展とともに川との隔たりをつくり交わることのない存在になった。

この関係性は本当に豊かだろうか。

もう一度川を受け入れ、人も川に受け入れてもらうための生活をする。

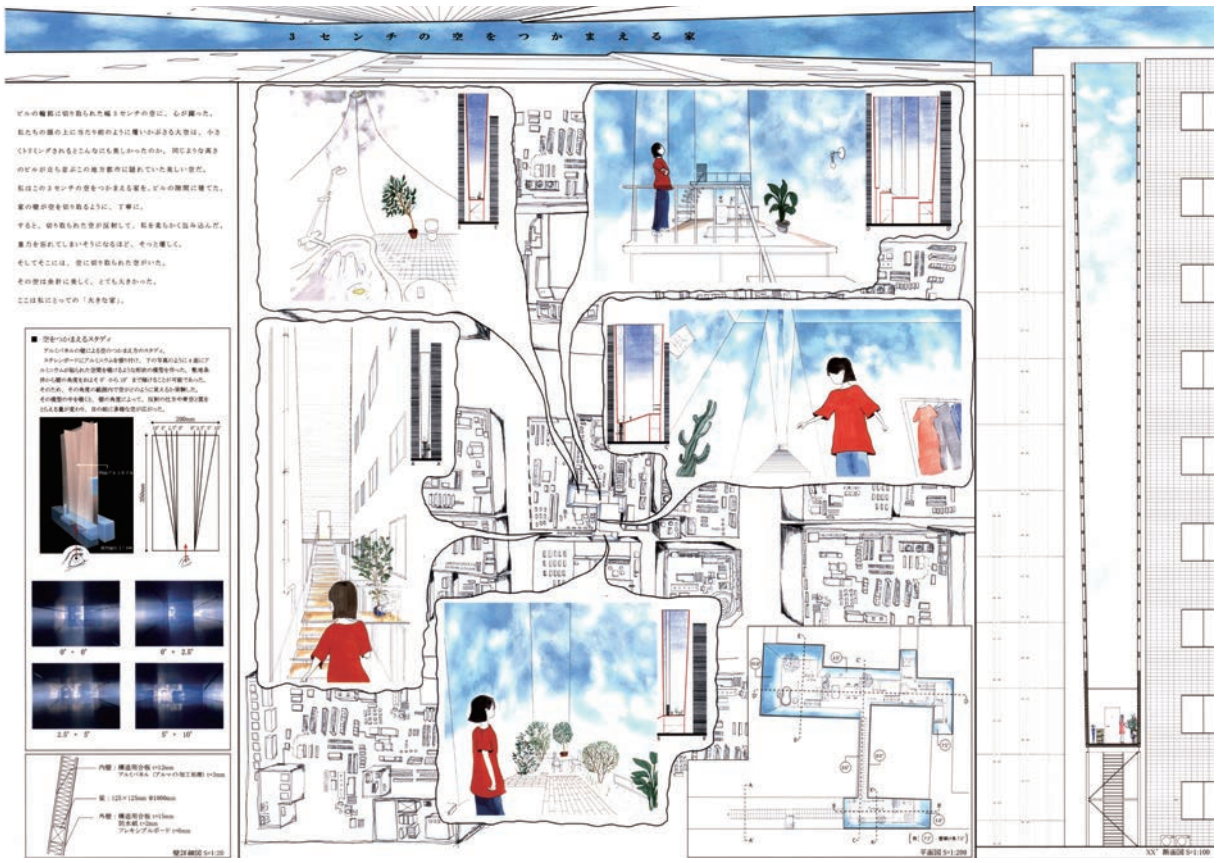
そこには人間以外の生物も住み着きヒエラルキーがなくなり、人は川という存在を守る役割を認識する。

川は生物間を超え、大きな共用スペースとなる。

その川の水を街へ緩やかにいなす。
この一帯は街の水を守る大きな存在となる。

銀賞

3センチの空をつかまえる家



服部 圭佑　（23歳）　九州大学大学院芸術工学府　専攻分野／芸術工学専攻
Keisuke Hattori

■共同制作者　柳　雄貴
Yuuki Yanagi

ビルの輪郭に切り取られた幅3センチの空に、心が躍った。私たちの頭の上に当たり前のように覆いかぶさる大空は、小さくトリミングされるとこんなにも美しかったのか。同じような高さのビルが立ち並ぶこの地方都市に隠れていた美しい空だ。私はこの3センチの空をつかまえる家を、ビルの隙間に建てた。家の壁が空を切り取るように、丁寧に。すると、切り取られた空が反射して、私を柔らかく包み込んだ。重力を忘れてしまいそうになるほど、そっと優しく。そしてそこには、空に切り取られた空がいた。その空は余計に美しく、とても大きかった。ここは私にとっての「大きな家」。

デザイン賞　銅賞

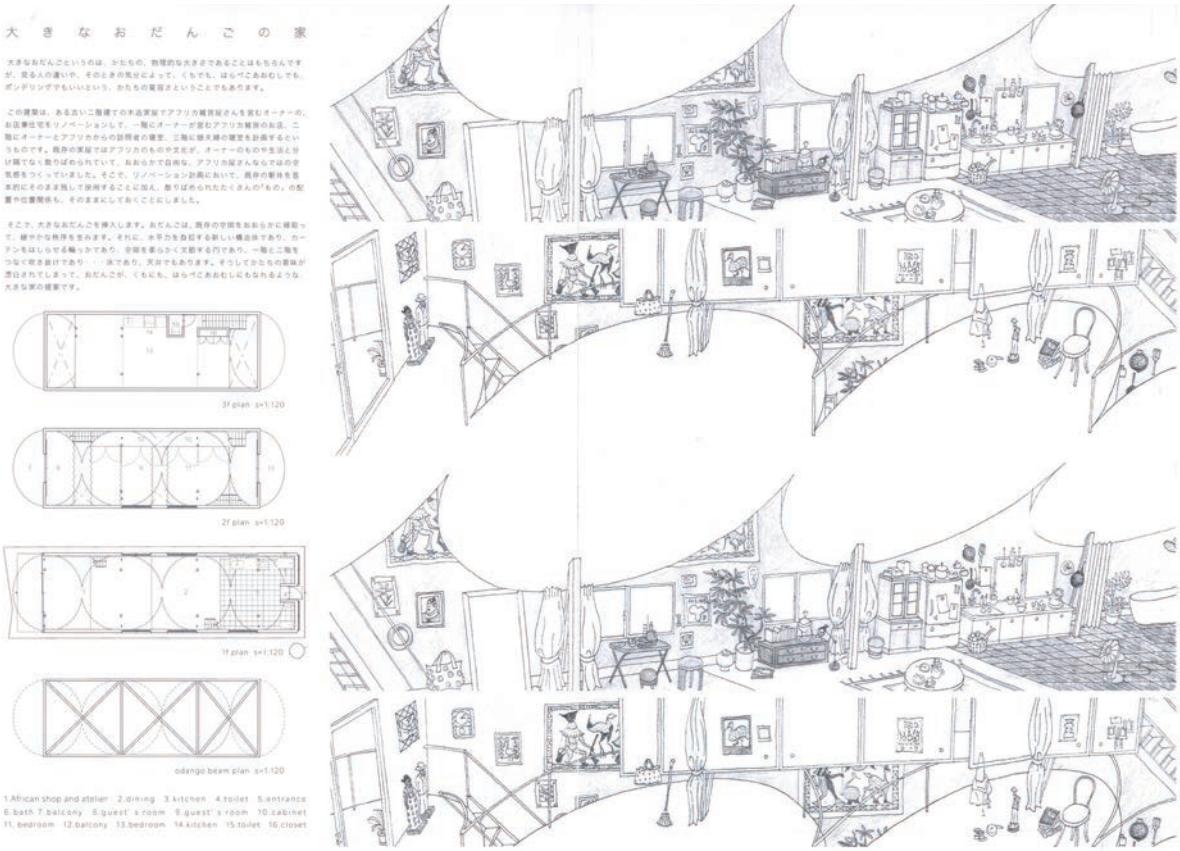
批評するキリン

坂野 修平　（24歳）　フリーランス
Shuuhei Sakano

自然の造形を直接的に引用するような創作物はあらゆる国や時代で作られてきましたが、現代においてそれらは自然と人間という二項対立の中で「偽り」であるとされます。そのような創作物をヒトの習性のあらわれとして種の観点において相対化し、肯定的な立場で捉え直そうというのがこの提案の趣旨です。それを表現する手段として、この提案では自然模倣的な造形の住宅と意味から独立した観測者としてのキリンの関係を描きました。

自然を不器用に信奉するかのような住宅とそれを受け入れるでも拒むでもないおおらかなキリンの様子にヒト以外の世界に対してのあるべき向き合い方を重ねました。そこには人間の不完全さを悲観するのではなく、その不完全な営みを種の特性として愛しながら、ヒト以外の世界に打ち出していくような方法でもって大きな世界と接続する手がかりがあるのではないでしょうか。

佳作A賞　大きなおだんごの家



杉山 峻涼　（22歳）　武蔵野美術大学 建築学科　専攻分野／建築
Shunsuke Sugiyama

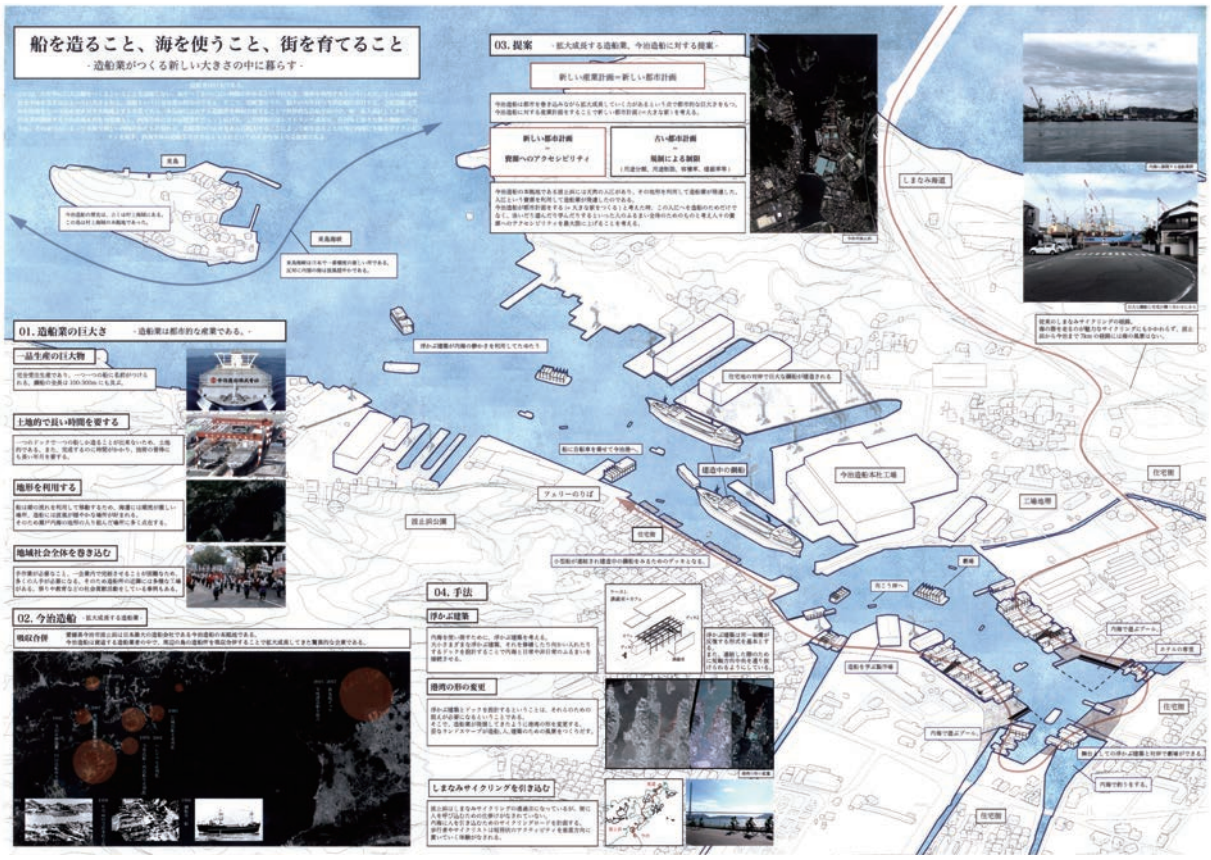
ある古い二階建ての木造家屋でアフリカ雑貨屋さんを営むオーナーの、お店兼住宅のリノベーションです。既存の家屋ではアフリカ屋のものや文化が、オーナーのものや生活と分け隔てなく散りばめられ、おおらかで自由な、特異の空気感をつくっていました。そこで、リノベーションにおいて、既存の躯体を基本的にそのまま残して使用することに加え、散りばめられたたくさんの「もの」の配置や位置関係も、そのままにしておくことにしました。

ここに、大きなおだんごを挿入します。おだんごは、既存の空間をおおらかに縁取って、緩やかな秩序を生みます。それに、水平力を負担する新しい構造体であり、カーテンがはしる輪っかであり、空間を柔らかく分節する円であり、一階と二階をつなぐ吹き抜けであり、天井であり、床であり・・・そうしてかたちの意味が漂白されてしまって、おだんごが、くもにも、はらぺこあおむしにもなれるような、大きな家の提案です。

デザイン賞

佳作A賞

船を造ること、海を使うこと、街を育てること
ー造船業がつくる新しい大きさの中に暮らすー



野中 郁弥　（26歳）　横浜国立大学大学院 Y-GSA　専攻分野／建築設計
Fumiya Nonaka

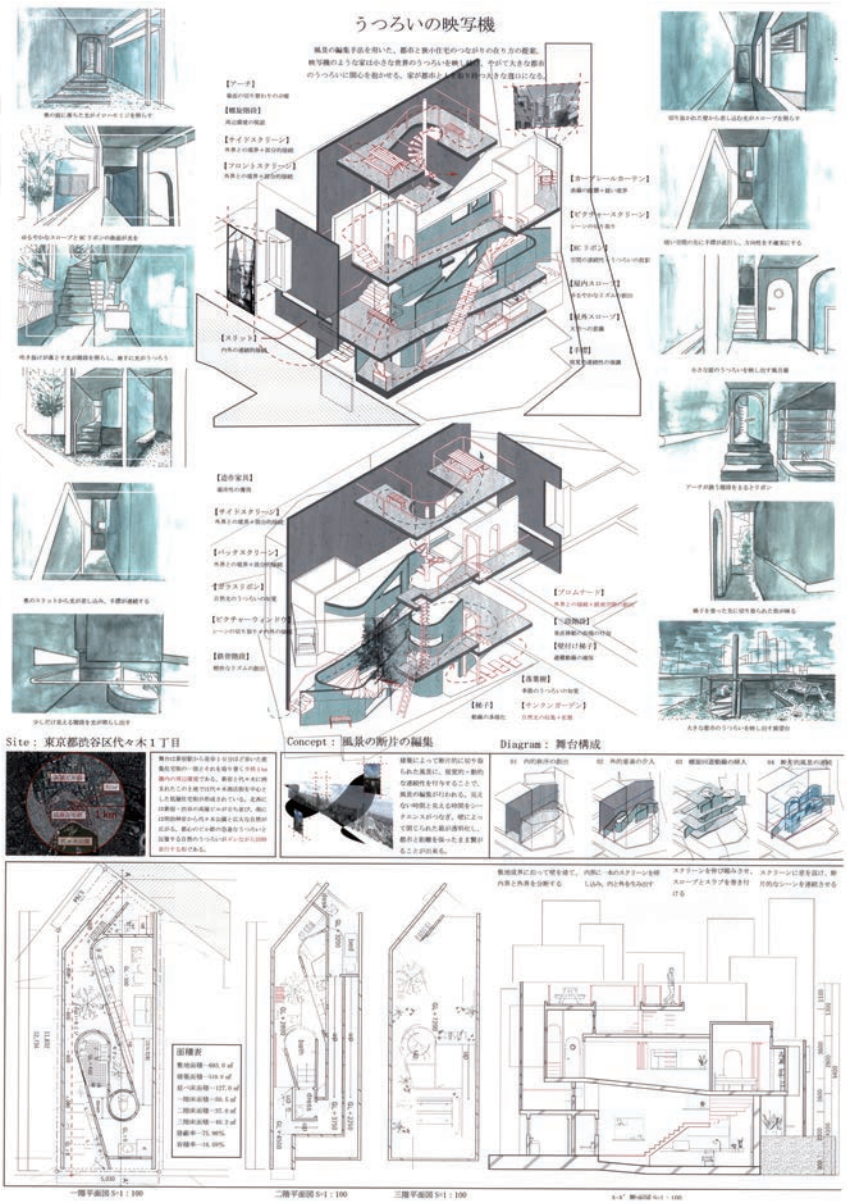
造船業は巨大である。これは、ただ単に巨大な船をつくるということを意味しない。船をつくるのに長い時間がかかるという巨大さ、地形を利用するという巨大さ、さらには地域社会全体を巻き込むという巨大さもある。造船という行為は都市的なのである。そこで、造船業のうち、最大の力を持つ今治造船に着目する。今治造船は豊かな内海をもつ今治市波止浜を本拠地とする企業である。多島海に点在する造船所を吸収合併することで世界的な造船不況の中、唯一拡大成長してきた。この企業が鎮座する今治市波止浜を対象地とし、内海全体に浮かぶ建築をだらっと広げる。この建築にはレストランや講義室、住居など様々な都市機能が内包され、その並び方によって多様で新しい内海のかたちが現れる。造船業の巨大さをさらに拡大することによって船を造ること以外に内海に多様なアクティビティを現す、内海全体が造船業だけでなく人々にとっての大きな家となる提案である。

佳作B賞　うつろいの映写機

宮本 皓生　（22歳）
Kouki Miyamoto

工学院大学
建築デザイン学科

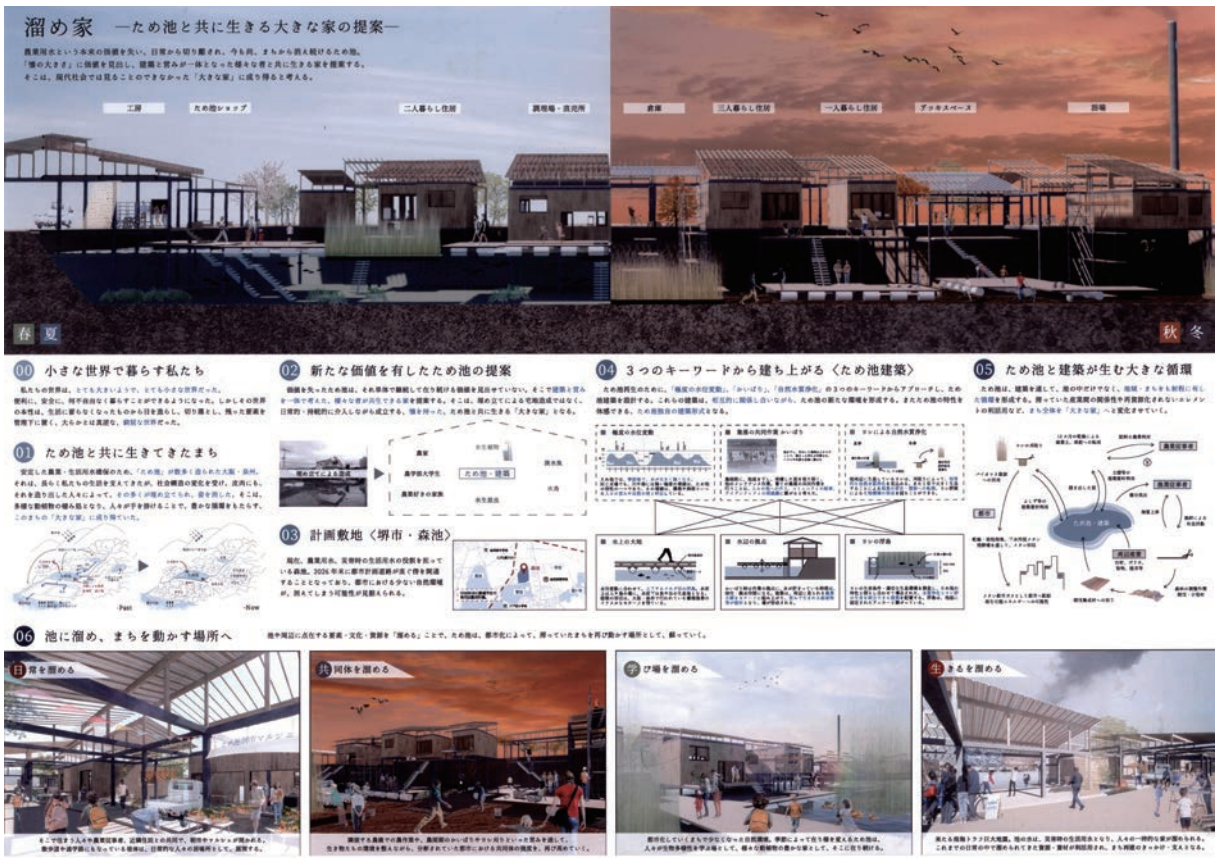
うつろいの映写機
風景の編集手法を用いた、都市と狭小住宅のつながりの在り方の提案。
舞台は高層ビル群がそびえ立つ新宿と代々木の狭間にひっそりと佇む低層住宅街である。
映写機のような家は小さな世界のうつろいを映し続け、やがて大きな都市のうつろいに関心を抱かせる。家が都市と人を取り持つ大きな窓口になる。
朝、カーテン越しに差し込む柔らかい日差し、庭の紅葉に集まる小鳥たち1日が始まる
吹き抜けから差し込む光が洞窟のようなリビングを照らす
ゆるやかなスロープを登り、アーチをくぐって家を出る
大きな道路を渡ると突然空は狭くなる
仕事を終え、都市の雑踏を抜けるといつもの街並みがあたりに広がる。周囲の建物から少しだけ首を伸ばした自宅と目が合う
靴のまま裏口から家をぐるりとかけ登り、屋上に向かう
夕日に照らされた高層ビル群が映し出す風景はまるで連なる山の端のようだ
どうやら都市は確かにそこにあり、私もここにいるようだ



デザイン賞

佳作B賞

溜（タ）め家（イエ）
―ため池と共に生きる大きな家の提案―



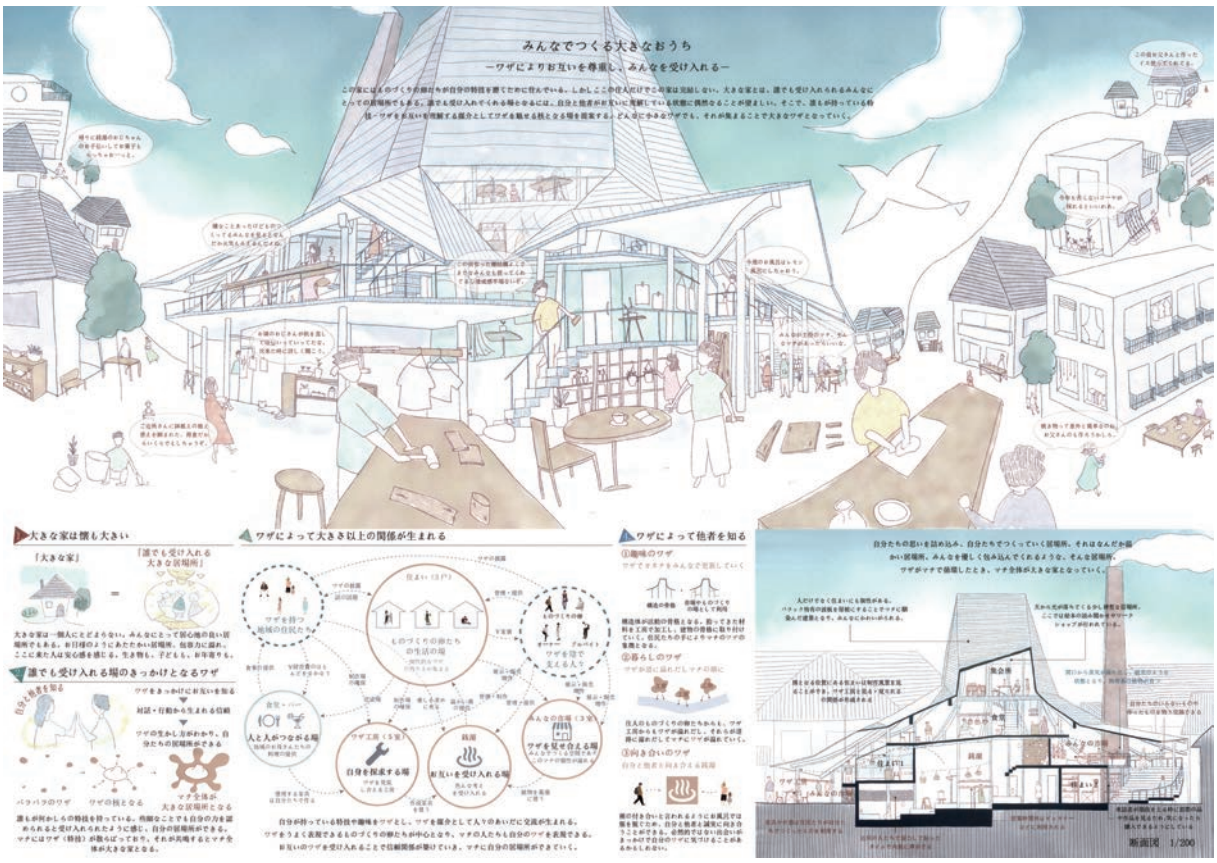
西尾 依歩紀 （21歳） 金沢工業大学 建築学部 建築学科 専攻分野／意匠
Ibuki Nishio

私の故郷、大阪・泉州に数多く点在するため池。社会構造の変化によって、農業用水という本来の価値を失い、人々の日常や社会から見放され、今も尚消え続けている。私は、ため池に対して、「懐の大きさ」に価値を見出した。そこで、建築と営みを一体で考えた、様々な者が共生する家を提案する。建築は、「極度の水位変動」、「かいぼり」、「自然水質浄化」の３つのキーワードからアプローチし、それらが相互的に関係し合いながら、新たなため池の姿を形成する。人々が池の環境を、日常的に手を掛けることで、人間も含めた多様な動植物の棲み処として生まれ変わる。池や周辺に点在する要素・文化・資源を「溜める」ことで、都市化により、滞っていたまちを再び動かす場所として蘇る。

そこは、生活に要らなくなったものから目を逸らし、切り落とし、何もかもを管理下に置く窮屈な世界では見ることのなかった「大きな家」に成り得ると考える。

佳作B賞

みんなでつくる大きなおうち
―ワザによりお互いを尊重し、みんなを受け入れる―



野中 美奈　（23歳）　横浜国立大学大学院 Y-GSA　専攻分野／建築都市文化専攻
Mina Nonaka

この家にはものづくりの卵たちが自分の特技を磨くために住んでいる。しかしここの住人だけでこの家は完結しない。大きな家とは、誰でも受け入れられるみんなにとっての居場所でもある。誰でも受け入れられる場となるには、自分と他者がお互いに理解している状態に偶然なることが望ましい。そこで、誰もが持っている特技-ワザをお互いを理解する媒介として交流できる場を提案する。ワザをきっかけにお互いを知り、対話や行動から信頼が生まれることで自分たちの居場所であることを実感する。

ワザで交流が生まれる場所は主にワザ工房とみんなの市場である。みんなの市場は既存の構造体に自分たちで加工してワザを展示できる場所としてカタチを更新していく。

ワザをうまく表現できるものづくりの卵たちが中心となり、マチの人たちも自分のワザを表現できる。やがて、マチに散らばったワザがこの場に集まり、それらが共鳴するとマチ全体が大きな家となっていく。

デザイン賞

佳作C賞

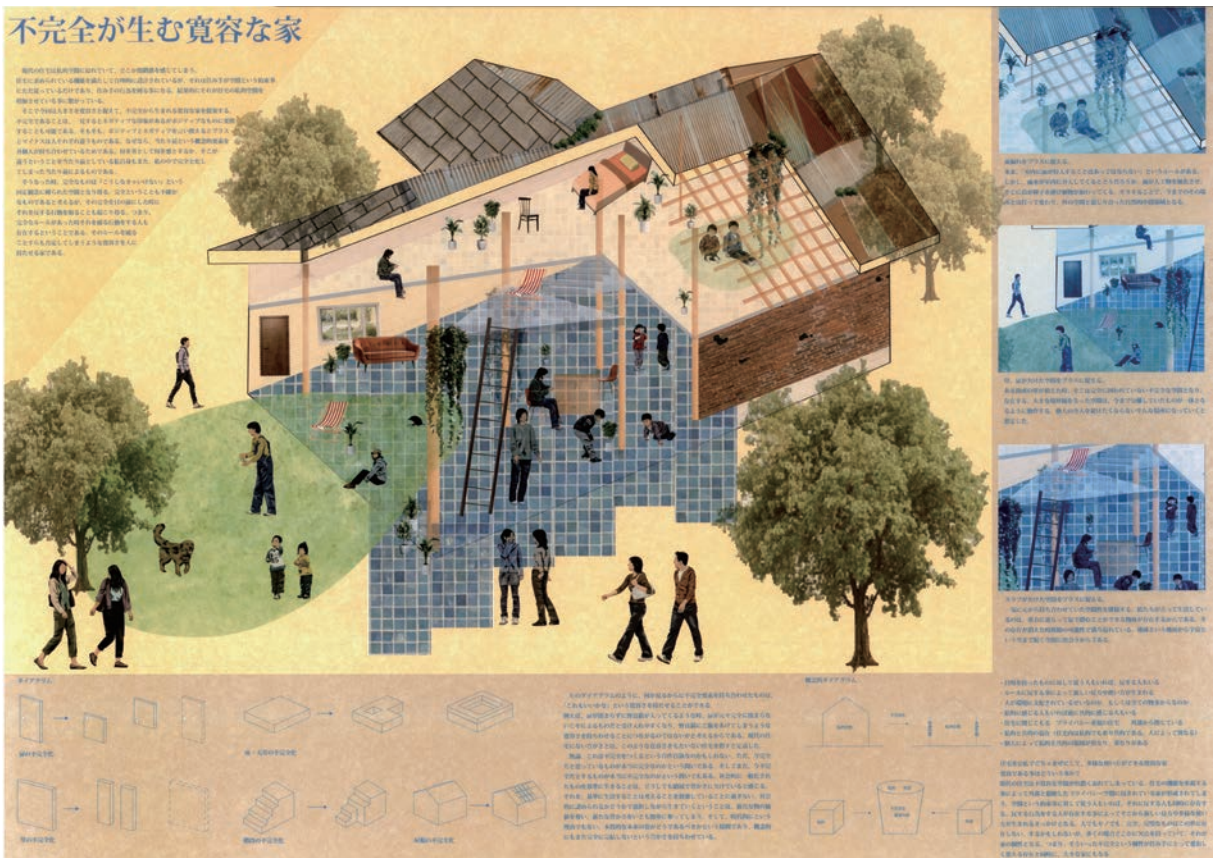
境界線に屋根をかける

岩下 隆平　（22歳）　東京工業大学　環境社会理工学院　建築学系　専攻分野／意匠系

Ryuhei Iwashita

今の住宅地には、家とその他公的空間を隔てる塀が未だに多く存在する。その線的な境界は、家を窮屈にし、プライベートの保護という意味を越えて強くそこに存在する。しかし、本来家とは、設計された建物のボリュームだけを指すものではない。住宅敷地という決定された線がありつつも、その線の上に設えを置いてみたり、そこで街の人と会話したり、BBQなどのイベントをしたりと、境界を空間的にうまく使うことで家の領域を拡張している瞬間がふとした時に発生していることがある。私にとって大きな家とは、家そのもの大きく設計するということではない。その家に内在するものを、誰のものでもない空間まで拡張して関係性をもつことである。本提案では、境界を空間化するために、線を引くのではなくそこに屋根をかけることでさまざまな活動を包み込める設えを設計した。この屋根は、延長された軒先となり、家は街に滲み出すことで、大きくて自由な存在になる。

佳作C賞　不完全が生む寛容な家



後藤 樹也　（21歳）　東北芸術工科大学　専攻分野／建築・環境デザイン学科
Tatsuya Goto

■共同制作者　竹澤 龍河
Ryuga Takezawa

現代の住宅は私的空間に溢れていて、どこか閉鎖感を感じてしまう。
住宅に求められている機能を満たして合理的に設計されているが、それは住み手が空間という約束事にただ従っているだけであり、住み手の行為を縛る事になる結果的にそれが住宅の私的空間を増加させている事に繋がっている。
そこで今回は大きさを寛容さと捉えて、不完全から生まれる寛容な家を提案する。不完全であることは、一見するとネガティブな印象があるがポジティブなものに変換することも可能である。なぜなら、当たり前という概念的要素を各個人が持ち合わせているためである。
完全なものは『こうしなきゃいけない』という固定観念に縛られた空間となり得る。完全ということも不確かなものであると考えるが、その完全、つまりルールを目の前にした時にそれを反する行動を取ることも起こり得る。そのルールを破ることすらも肯定してしまうような寛容さを人に持たせる家である。

公益財団法人 ユニオン造形文化財団

■事務局

〒550-0015 大阪市西区南堀江 2-13-22

TEL.06-6532-8764 FAX.06-6533-1028

https://www.uffec.com